

明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展

The Early Development of Reference Work in
Japanese Libraries, 1868-1920

北 原 圀 彦

Kunihiko Kitahara

Résumé

Reference work in Japanese libraries has often been called “a postwar product.” And we have not cared much of prewar development of reference work, although some librarians have studied with the development of reference work after 1920's. If we carefully investigate the literature on library services in the late 19th century, we find that reference work or personal assistance was discussed earnestly in those days. Examining various definitions of reference work, we also find that both postwar and prewar reference work were brought from U.S.A., who is the pioneer of reference work.

In this paper, the writer traces the development of reference work in Japanese libraries during 1868-1920. This period is an embryonic period of prewar reference work. He makes it clear how reference work was introduced into Japan, and how the necessity and importance of reference work has been stressed in Japanese libraries. The reason why he deals with the development of reference work up to 1920, is because since then reference work seemed to spread throughout Japan.

People who brought personal assistance in Japan for the first time were students returned from U.S.A. in the late 19th century. Since October 1907, *Toshokan Zasshi* (The Library Journal) has contributed in the development of reference work.

In the Teikoku Toshokan (Imperial Library), they tried to put reference work into practice in the late 19th century. Reference work of the Library has been advanced without a hitch since then but it was not performed by the full-time officers. In those days, the (Tokyo Metropolitan) Hibiya Library and the Kyoto Prefectural Library adopted new and remarkable service methods. And, the Kobe City Library and the Okayama Prefectural Library were also ready to promote further advancement for reference work.

(Machida City Library)

は じ め に

I. 序 論

II. 近代的図書館の建設と“人的援助”の紹介 明治初年—明治39年

III. レファレンス・ワークのあけぼの 明治40年—大正9年

お わ り に

はじめに

すべての人間は、知る権利を有する。しかし、わが国の場合、そうした権利がすべての人々に賦与され、また人々がそうした権利を主張するようになったのは、それほど古いことではない。近代史における明治維新、第2次世界大戦の敗戦等は、人々のそうした権利の著しい拡大に功績のあった事件である。

さて、過去の人々の文化的遺産を継承する図書館が、人々の知る権利の拡大に資するためには、蔵書の名で呼ばれるそれらの文化的遺産を、知る権利を主張する人々の利用に委ねなければならない。その図書館に近代的という形容がなされるか否かのひとつの基準は、ここに存するといえる。こうした公開性を有する図書館によって、近代的図書館サービスの歴史は築かれ、図書館員は従来の書庫番を脱して、本来の使命に目覚めて行った。

わが国における明治以後の図書館サービスの発展をたどることは、とりもなおさず、わが国の近代化に果した図書館の役割を考察することへとつながるものでなければならない。それは、従来の図書館史には見出し得ない姿勢である。結果としてどうあれ、こうした姿勢は常に保たなければならないのである。

今日、一般に図書館が行なう資料や情報の収集・組織化は、すべてそれらの利用されることを前提としている。そして、多くの図書館では、そうした資料や情報が、より多くの人々により有効に、より容易に利用されるよう、様々な努力と工夫とを重ねている。

レファレンス・ワークは、そうしたもののひとつとしてとり上げられ、今日では近代的図書館サービスを代表するものといわれている。それは、レファレンス・ワークが、知る権利を主張する人々の要求に最も適った図書館サービスとして、発生当時から今日まで、人々の知る権利の拡大に貢献して来たからにほかならない。このことは、レファレンス・ワークの先駆的な発展をみた米国のみならず、わが国についてもいい得るであろう。

さらに、レファレンス・ワーク発展のかげには、常に利用者を忘れない図書館員が存在していなければならないという点にも、思いを馳せるべきである。図書館サービスに限らず、すべてのサービスが、それを提供する側と享受する側との両面において考察され、かつ両者を取り巻く時代的背景等、諸種の条件についても斟酌されなければならないであろう。

文明に対する歴史の重要性は、何世紀にもわたって、哲学的にも科学的にも、また精神的にも認められて来た。文明の記録に関係する図書館員の職務が、それ自身の歴史を意味のないものと見なし続けて行けるなどとは、思いもよらないことである。¹⁾

Louis Shoresがここで強調する“歴史”は、従来の図書館史とは異なるものである。E. ハーバート・ノーマンのことばを借りるならば、“歴史は過去の人々の行動を組織的に研究する学問である。歴史の人類に対する関係は、記憶の個人に対する関係と同じである。”²⁾ 真の図書館史は、物理的存在としての建造物や蔵書だけの歴史ではなく、それらを舞台に、図書館員と利用者とが繰り広げる人間の歴史でなければならないのである。

本稿の目的は、近代的図書館サービス発達史の一環をなすものとして、とりあえずわが国におけるレファレンス・ワークの発展ぶりとそれにかかわる様々な問題を、主に図書館員の側の文献を通して記述しようと試みることである。わが国におけるレファレンス・ワーク発展の一端が記述されることによって、わが国においてもこの分野への関心が高まり、やがてはその全容が明らかにされる日の来ることを期待したい。それは、真の意味の図書館史の誕生にも役立つものであると信ずる。さらに、こうした試みが、人々の知る権利の拡大に貢献して来た先輩の図書館員の業績を、再検討しようとするものであることも銘記したい。われわれは、図書館史を通じて、“将来の見通しを回復し、長年専門職に従事しもっと報いられてもよい人々に対しても、遅滞きながら認識を与えるのである。”³⁾

I. 序 論

実際にレファレンス・ワークの発展ぶりを記述するに先立って、本章では、記述に際して考慮しなければならない定義等の問題を検討し、過去におけるこの分野の研究にも言及して、レファレンス・ワークの発展に関する研究の序論としたい。

A. 定 義

レファレンス・ワーク (reference work) は、今日、一般的には‘参考事務’の名で呼ばれることが多い。しかし、ちょっとした注意さえ払えば、誰でも似たようなことばが数多く存在することに気づくであろう。この辺の事情を三宅千代二は次のように指摘している。

この言葉は図書館の利用者には勿論のこと、図書館員にも十分理解出来ていない面があった。従ってお互の間には“参照事務”“読書相談”“読書案内”“閲覧指導”等々の語が同義語として手軽に取扱われて来たと思われるし、場合によっては“読書指導”といった語までが広義の参考事務であるとも解せられていた。⁴⁾

こうした事実は、第2次世界大戦前のレファレンス・ワークに関する記事の中に多く見られる。但し、三宅の指摘するような図書館員自身の理解不足や語義の広狭だけが原因ではなかったようである。“……「読書相談事務」トハ「参考事務」トカ「案内事務」ナドト呼バレテ居ル事ト同じ意味ノ事ヲ指スノデアッテ、……”⁵⁾とか、“……圖ニ於ケル参考事務ワ、読書相談事務ト資料相談事務ノ外ニ、所謂「読書指導」ト称セラルモノ……指導事務オモ包含シテイルノガ夫ノ特色デアル。”⁶⁾といった記述のほかに、次のような例も存在しているからである。

此[参考事務]は Reference Work の訳語から来たものらしいが此の参考……なる語は余りポピュラーでない様である。故に我が市立名古屋図書館では、……日本式な読書相談所と云ふ名称を付して開設したのである。此なら誰にでも分かると思ふ、だが此の名称は警察署の人事相談所を連想し易い。よって何か好い名はないかと探し、名付親は相当に苦しんでみたが結局こんな名称に落着した。⁷⁾

……読書案内と云ふ言葉を使ったのは明治大学図書館の慣例に従ったもので、もとより之は参考事務(Reference Work)の意味であって、単なる読書案内(Inquiry or Information Work)の意味ではない。⁸⁾

こうした用語の多様性は、戦後 20 余年を経過した今日でも同様に指摘されよう。最近では佃実夫が次のように述べている。

「レファレンス」で、一般に通じると好都合なのだが、そうもいかないため日本の図書館では、さまざまな訳語をつくり出した。

「参考業務」「参考奉仕」「調査・相談」「相談事務」「参考調査事務」などである。いずれのことばも、

びったりした日本語とはいいい難く、適切な訳語がない。

……なかには、「よろず相談」と俗称している図書館さえあるほどである。⁹⁾

ところで、佃が列挙したこれらのことばのうち、“参考業務”ということばは、“参考事務”、“参考事業”等ともかなり早い時期から使われ出したものである。ところが、“参考奉仕”だけは、“参考事務”等のことばとはその系譜を異にしている。すなわち、第2次世界大戦後のある時期から米国においては、レファレンス・サービス(reference service)の方がより多く用いられるようになった。¹⁰⁾ そのために、わが国においてもレファレンス・サービスに対することばとして、“参考奉仕”という訳語が作られたのである。その他のことばについては、それらがレファレンス・ワークを意味するのか、レファレンス・サービスを意味するのか、それとも全く別のことばであるのか定かではない。

また、レファレンス・ワークに相当する“参考事務”と、レファレンス・サービスに相当する“参考奉仕”との間に、内容の上でどの程度の差があり、実際問題として、日常業務の中で使い分ける必要があるかどうかは甚だ疑問である。少なくともわが国の場合、両者を区別するような明確な定義づけはなされていない。

しかし Samuel Rothstein の場合だけは、わが国におけるこの種のサービス様式の発展をたどる上にも参考となろう。彼は 1891 年の William B. Child に始まって、Alice Bertha Kroeger (1902), William Warner Bishop (1915), James I. Wyer (1930), Margaret Hutchins (1944) を経て Lucy I. Edwards (1951) に至るまで、計 6 人の定義をそれぞれ紹介し、次のような結論を下した。“レファレンス・ワークの本質的特徴は、個々の読者に対して図書館員から与えられる人的援助(personal assistance)である。”¹¹⁾ また“レファレンス・サービスは、情報を求める個々の読者に対して図書館員が人的援助を与えるだけでなく、そういった援助が図書館の責任においてなされなければならないことをはっきりと認識し、そのための特別な組織をも設けることである。”¹²⁾

Rothstein がこの種のサービス様式を、

1. 情報を求める個々の読者に対して図書館員から人的援助が提供されること。
2. そういった援助が、教育機関としての図書館の使命遂行に不可欠の手段であることを図書館自体

が認識し、援助を提供するための明確な責任をとること。

3. レファレンス・ワークの技術を習得した職員によって構成される、援助を行なうための特別な管理単位が存在すること……¹³⁾

という3段階に分析し、かつ人的援助の提供からそのための特別な組織の確立に至るまでの過程で、両者を区別しようと試みたのは、彼の論文が、米国におけるこの種のサービス様式の発展をたどることをテーマとしていたからである。この方法は、論文を構成する上で都合がよかった。また、彼の細密な分析に基づく定義通り、米国においては、レファレンス・ワークからレファレンス・サービスへと発展して来たのである。

さて、わが国の場合には、この種のサービス様式に対してどのような定義づけがなされているであろうか。以下、過去における主な定義を振り返ってみることにする。

わが国において、初めてレファレンス・ワークの定義らしきものが述べられたのは、大正5(1916)年10月9日のことである。米国の図書館学校における約1年間の留学を果して帰国した、早稲田大学図書館員毛利宮彦は、山形市で開かれた第11回全国図書館大会に臨み、第1日目に山形県会議事堂で講演した。『図書館雑誌』第29号(大正6.2)に掲載の「個人と公衆図書館」というのが、その時の講演である。その中で、彼は次のように述べている。

レファレンス・ワークと謂ふのは、かう云ふ種類の本をみたいがどう云ふものをみればいゝだらうとか、かう云ふ事実を調べたいがどう云ふ本をみればいゝだらうとか、と云ふ様な様々の質問に応じて、館員が夫々適当と思はるゝ図書を提供し、またそれについて指導するのである。但し茲で忘れてはならないのは此レファレンスライブラリアンは飽く迄読者に対して従属的、補助的であらねばならぬと云ふことである。”¹⁴⁾

こうした考え方は、留学中の講義等様々な経験・見聞によったものであると思われるが、毛利は講演の冒頭で次のように断っている。

……アメリカのセントルイス公衆図書館長のポストキック [Arthur Elmore Bostwick] 氏が至極興味ある説を発表しましたから、私は其説を経にし、ま

た私が彼地で見聞致した事実を緯にして、茲に御紹介傍お話致さうと存じます。¹⁵⁾

東京市立日比谷図書館頭の今沢慈海が、「参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務」と題する論文を『図書館雑誌』に寄せたのは、大正13(1924)年3月のことである。

図書館に於ける参考事務とは、閲覧人の希望に応じて所要の図書を搜索供給し、彼の研究調査に助力を与ふことで、これは公共図書館に於ける教育事業の主要部分を為すものである。¹⁶⁾

今沢は、この論文の出典を次のように明らかにしている。“……クロージャー [Alice Bertha Kroeger] 及びムツヂ [Isadore Gilbert Mudge] 等の説に斟酌し、参考書の意義、図書館に於ける参考事務及びその利用法に就いて少しく述べて見たいと思ふ。”¹⁷⁾

小谷誠一は、大正15(1926)年4月「図書館に於ける参考事務」と題する論文の中で、先ず“米国ニューワーク公共図書館長ダナ [John Cotton Dana] 氏”¹⁸⁾の意見を紹介している。

図書館に於ける参考事務の第一要諦は閲覧者をそらさぬことである。初めて登館した者には図書館はいかつい所と感じられるものであるが、たじろぎながら登館して見ると館員達は忙しさに働いて居る。と、自分の疑問などはつまらないもののやうに観ぜられ、恠んな事で偉らさうな而も忙しい館員を煩すことは出来ない、と恠んな具合から帰つて了ふのである。

と述べ、かゝる閲覧人の応対について種々の注意を掲げ、この種の閲覧人に対する応答の用意として、所謂参考図書の蒐集、応答カードの作成等の必要を論じ、これらの仕事を参考事務と言ふ、との意見を発表して居る。¹⁹⁾

次に“米のポストキック [A.E. Bostwick] 博士”の“参考図書閲覧室”に関する意見²⁰⁾を掲げた後、“英国図書館界の権威故ブラウン [James Duff Brown] 氏”の説を紹介している。

参考事務とは公衆に伍して実業に従事する者その

他の人々に質疑の応答をなすことである。本来簡単な調査に従ふことで、所謂参考図書を材料としてなされるのである。²¹⁾

そして、最後に小谷自身の次のような解釈を添えている。

要するに参考事務とは、文献となった凡ゆる材料を蒐集しこれを以て、公衆の要求に応答することを意味し、公衆の為めのよろづ調査所とも云ふべきものである……²²⁾

この小谷の定義は、ほぼそのままの形で、昭和2(1927)年1月²³⁾と3年12月²⁴⁾に市立名古屋図書館員塚本勝雄によって繰り返されている。

先に述べた毛利宮彦は、昭和5(1930)年にはその著『内外参考図書の知識』の中で、ふたりの米国人の考え方を紹介している。

“参考事務とは何であるか、これに対しビショップ [William Warner Bishop] 氏は一言を以てすれば「図書館の紹介者(インタープリター)」であると言っている。ダーナ [J.C. Dana] 氏は……一般読者が知らんとする或る事柄又は或る事項に関する研究の資料に対して、参考室に蒐集されてある所の百科辞書、辞彙、年鑑、人名録、統計、地図、案内記、書目、または時事問題に関する図書其他の一般参考図書の利用に、参与して之を指導するにある。但しこれは狭意の参考事務であって、其の広意に於ける場合には目録の活用を説明し、閲覧室、雑誌室等に於ける秩序維持を監督し、図書に関する様々の質疑に応答するなど、一般館内に於ける図書の利用に関して凡て読者を保助し指導するにあるので、尚進んでは……図書館間の参考事務を始め、読者より要求された事項を調査するために官庁及び個人の専門家にについて研究したり、又は電話に依る質疑に応答したりする事務等にまで努めて当るのである。²⁵⁾

なお、ここで紹介された W.W. Bishop と J.C. Dana の定義は、昭和11(1936)年に出版された毛利宮彦の別の著書『図書の整理と運用の研究』にも、そのまま転載されている。²⁶⁾

昭和5年から6年にかけて、植村長三郎は、「学校図経

管概論」と題する論文を『園研究』に寄せた。それは、J.I. Wyer の *The college and university library*²⁷⁾ 等を参考にして執筆されたものである。この中で植村は、学校図書館の管理について述べ、その仕事をいくつかの事務に分類した。“教育的事務”というのはその中のひとつで、それは、“参考”、“訓練”、“教育的並ニ職業指導”から成るものとされている。ここで問題にするのは、“参考”事務であるが、彼はその内容について次のように説明している。

教師及生徒が特殊問題ニ就イテ材料ヲ見出スタメノ補佐、教授題目ニ関スル論文又ハ新本ノ提供。教室若クハ実験室ニ生ジタ疑問ニ応ズルコト。学課の補佐的読書ノ材料ヲ準備スルコト。²⁸⁾

このように、植村がレファレンス・ワークの一面を具体的に述べることができたのは、上記 Wyer 等の著作のおかげであろう。

昭和11年に、武田虎之助が次のように述べたのは、J.C. Dana 等の影響によるところが大きいと思われる。

広義ノ参考事務ハ即チ物言フ圖デ、登館者ヨシ、電話ヨシ、アラユル質問ニ解答ヲ与ヘル働キデアルガ、コレハムツカン過ル注文ダカラ差控ヘルトシテ、狭義ノ参考事務即チ物言フ目録ノ備付ヲ希望シタイ。²⁹⁾

“物言フ目録”というのは、その図書館の蔵書に精通した館員のことで、出納台等において利用者の質問に答えたり、図書館の利用方法を指導したりする役目を負っているのが普通である。古くから“活ける目録”等の呼び名で知られているものと、ほぼ同義であるともてよからう。

田村盛一は、「園出納所ノ本質ト事務」と題する長い論文の中で、“読書相談事務”という名称の下にその仕事の扱かうべき範囲を明らかにしている。

広ク公衆カラ読書上ニツイテ、或ハ研究調査上ノ参考書ニ関スル相談、図書ノ購求ニ就イテノ相談等ニ接シテ、ソレゾレ圖的立場カラ解答ヲ与ヘ、又ハ参考書ヲ提示シテ研究調査上ノ助勢ヲスル³⁰⁾

渋谷国忠が昭和14(1939)年1月の『図書館雑誌』に

発表した論文³¹⁾には、James I. Wyer の指摘する“保守 (conservative)”³⁷⁾ 理論の強い影響が伺われる。渋谷の述べた定義は、特に断っていないが、W.W. Bishop のものであろう。³³⁾ 次のように記されている。

参考事務は、公衆の何等かの研究調査に対して図書館が与へるところの助力である。……しかし、参考事務の公衆へのサービスは、どこまでも助力乃至相談手であって、公衆の代りに研究調査をしてやることではない。……研究調査は公衆自身がやるべきである。³⁴⁾

さらに彼は、“自由 (liberal) 理論”³⁵⁾ の弊害にもふれて次のように述べている。

参考事務の任務は、公衆に研究調査上の助力を与えることであって、研究調査そのものを代行することではない。この間の区別を無視することは、公衆の図書館認識乃至図書館訓練を誤る結果を来すと同時に、参考事務の能率を害し、乃至はそのサービスを公衆の広汎なる層に及ぼすことを阻害するに至るであらう。³⁶⁾

第2次世界大戦前における最後の定義は、山下栄によってなされた。彼が『園研究』に発表した論文「医学園ニオケル雑誌利用法」³⁷⁾は、量的にも質的にも、戦前におけるこの種の研究の最高水準を示すものといえるだろう。山下は其中で「図書及園ノ能率的ナ利用法ニ関シテハ……参考事務 (Refernce work) ト称スルモノガアル」³⁸⁾と述べ、さらに次のように続けている。

コノ事務ハ限定サレタ内容ヲ有スルモノデハナイガ園機能ノ完全ナル發揮ヲ目的トスルモノデ之ヲ要スルニ園デ為シ得ル研究・調査ニ関シノ簡易ナル質問ニ対シテハ進ンデ調査応答シ又ハソノ調査ノ方法ヲ案内スル等凡テ図書ヲ通ジテ解決ヲナシ得ル閲覧者ヘノ直接的ナサービスノ一デアル。³⁹⁾

山下のこの定義が、どういう人々の影響を受けてなされたかは不明である。しかし、同じ論文の中で J. D. Cowley の著作⁴⁰⁾や J. F. Ballard の論文⁴¹⁾等を引用しているところからみて、英米特に米国の強い影響があったことだけは指摘できよう。

第2次世界大戦後のわが国図書館界が、その再出発にあたって模範としたのは、米国の図書館サービスである。中でも、終戦後いち早く設置された CIE (民間情報教育局) 図書館、昭和23 (1948) 年、連合国軍総司令部に提出されたイリノイ州立大学図書館長の Robert B. Downs によるいわゆる「ダウズ報告書」、昭和26 (1951) 年、慶應義塾大学内に設けられた日本図書館学校での米国人教授による講義等の影響は、特に大きかった。

第2次世界大戦後、レファレンス・ワークに関して、わが国の図書館関係者が最も深い感銘を受けたのは、昭和26年に日本図書館学校で行なわれた、2度にわたる図書館専門職員指導者講習会での Frances Neel Cheney の講義といわれる。⁴²⁾ 受講生のひとりである品川区立図書館の伊藤旦正は、「公共図書館における参考事務の運営について」の中で、レファレンス・ワークを“図書館資料を利用しようとする人々に対して職員が直接的援助をする業務”⁴³⁾と定義した。これは、F. N. Cheney によって紹介された Margaret Hutchins の定義⁴⁴⁾を簡単にしたものである。

昭和26 (1951) 年に開かれた第1回図書館専門職員指導者講習会において研究され、編集された『図書館学講義要綱』は、間もなく改訂を余儀なくされ、昭和27 (1952) 年にはその改訂版が出版された。それによると、レファレンス・ワークの定義は、第1章のレファレンス・ワークの意義というところで、役割や要求とともに論じられることになっている。しかし、実際の講義内容は、“……Kroeger [Alice Bertha], Mudge [Isadore Gilbert], Wyer [James Ingersoll], Hutchins [Margaret] 等の説を参照して一応の定義づけを……”⁴⁵⁾ 行なうに過ぎなかったようである。

結局、第2次世界大戦後のレファレンス・ワークも、戦前同様、あるいはそれ以上に、米国の強い影響を受けて始められることになったのである。国立国会図書館一般考査部が発行した、『考査事務参考資料』と題するシリーズを見ても、昭和28年度図書館専門講習 東東大学養成講習 レファレンス・ワーク・テキストである『大学図書館のレファレンス・ワーク』が、イリノイ大学図書館のスタッフ・マニュアルを翻訳したものである⁴⁶⁾ということを考えても、米国の影響がいかに強いものであったかは、容易に理解できよう。

その後、レファレンス・ワークをわが国の社会に適したものにしようという試みも始められ、日本図書館協会公共図書館部会参考事務分科会等が中心となって、活発

な活動を続けている。こうして生まれたのが、「参考事務規程」(昭和36)である。“……公共図書館における参考事務の処理について、その正確と迅速を期することを目的とする⁴⁷⁾ この規定は、参考事務を回答事務と参考資料の整備というふたつの面に分けて定義している。すなわち、前者は、“図書館に寄せられた質問・相談に接し、図書館の資料と機能を活用して質問者に援助を与えること”⁴⁸⁾であり、後者は、“質問の予想される主題に関し、必要な資料を整備・作成すること”⁴⁹⁾である。後者の参考資料の整備は、L. Shores があげた6項目にわたるレファレンスワークの機能のうちの、書誌的機能(The bibliographic function)⁵⁰⁾と評価的機能(The appraisal function)⁵¹⁾とに相当するものと思われる。いずれにしても、参考事務分科会のこの定義は、従来の定義をよりわかりやすく、また、より具体的にしたことにより意義を有するものであろう。こうした定義づけの背景に、A. B. Kroeger, I. G. Mudge, J. I. Wyer, M. Hutchins 等の影響があることは、否定できないのである。

最近では、国立国会図書館の小田泰正が、「図書館の仕事シリーズ」の中の1冊で、次のように定義している。

レファレンス・ワークとは、なんらかの情報を求めて図書館を利用しようとする人が、図書館を効果的に利用できるように、図書館員が直接その利用者を、できるだけ援助する仕事のことである。⁵²⁾

これとても、既に述べたような、米国人によるいくつかの定義を参考にして、書かれたものであろう。

以上列挙し、解説して来た様々な定義から明らかなように、わが国におけるレファレンス・ワークの概念は、先駆的な発展を遂げた米国から直接移入されたものである。移出国が米国であるという点でも、また影響を与えた米国人にそれほど異同が見られないという点でも、第2次世界大戦前のレファレンス・ワークと第2次世界大戦後のそれとの間には、概念に関する限り、大差はないのである。実践の上で大きな差異があるとすれば、それは、受け入れる側の社会情勢の変化と、直接、受け入れに携わる人々の態度の変化とによるものであろう。

わが国におけるレファレンス・ワークの発展をたどる場合に遭遇する、レファレンス・ワークとは何かという問題は、米国におけるそれについて詳細に論述し、かつ周到な分析を加えた S. Rothstein の定義を借用することで解決されると思われる。彼が紹介した、1891 年の

William B. Child と 1951 年の Lucy I. Edwards の定義がわが国に与えた影響は、依然不明である。しかし、他の人々の定義は、いずれも、わが国におけるレファレンス・ワークの発展にかかわりがあったものばかりである。

本稿では、既に言及した Rothstein の考え方に従って、レファレンス・ワークを、情報を求める個々の利用者に対して図書館員から与えられる人的援助であると定義する。しかし、彼のように、レファレンス・ワークとレファレンス・サービスとをことばの上で使い分けることはせず、レファレンス・ワークのみを使用して行くことにする。また、レファレンス・ワークからレファレンス・サービスへの移行が進む段階で、すなわち、レファレンス・ワーク実施のための特別な組織が確立され始める時期において、両者を区別する必要が生じた場合には、何らかのことばを補って記述を進めれば足りるのであろう。

次に、レファレンス・ワークの本質的特徴である人的援助について説明しよう。人的援助というのは、情報を求める個々の利用者とその情報を含んでいるところの資料、あるいはその情報を求める際に手がかりとなる資料・人・機関等とを結びつける働きをするものであり、多くの場合、図書館員の個人的な援助という形式をとる。いうまでもなく、それは人によってなされるものであり、目録とか書誌・索引類など、人間以外のツールの働きとは、はっきりと区別される。後者は、人でなく物によるという意味で、しばしば物的援助と呼ばれている。当然のことながら、両者は互いに補い合っており、よりよい図書館サービスの提供に貢献しなければならないのである。

B. 過去における研究とその問題点

既に、定義の部分でも述べたように、レファレンス・ワークがわが国に紹介され、あれこれと論じられるようになってからいく久しい。S. Rothstein によれば、今日、米国の図書館において固有の領域を占めると考えられている、レファレンス・ワークの問題がとり上げられるようになったのは、19世紀末葉のことである。⁵³⁾ 特に、第1回全米図書館大会(1876)における、ウスター公共図書館長 Samuel Swett Green の発表⁵⁴⁾は、この種の新しいサービス様式の顕著な事例を紹介したものとされている。その後、多少の問題はあったが、レファレンス・ワークは、大体順調な普及と発展を遂げて行った。そして、世紀の交代を経て第1次世界大戦に至る頃までには、小規模の公共図書館や分館だけでなく、従来発達が遅れていた大学図書館においても、レファレンス・ワークを

行なう部門の必要性が認められるようになった。

ところで、当時のわが国は、開国、明治維新を経て文明開化の時期に入っていた。それは、わが国の近代化が急速で展開された時期である。わが国における近代的図書館の建設もまた、この時期に始まったのである。

しかし、わが国におけるレファレンス・ワークの発展については、従来大正時代から論じているものが大部分で、わずかに、長沢雅男が、明治 43 (1910) 年に発表された坂本四方太の論文を手がかりとして、当時の帝国図書館に言及しているのみである。⁵⁵⁾ わが国におけるレファレンス・ワークの初めを、大正時代の東京市立日比谷図書館と帝国図書館とに求める考え方は、昭和 26 (1951) 年、三宅千代二によって発表された論文「日本に於ける参考事務とその文献」⁵⁶⁾ によるところが大きい。以下、その内容を簡単に紹介する。

“……慶應大学日本図書館学校のフランシス・チェニー [Frances N. Cheney] 教授から懇切な指導と激励を受けて……”⁵⁷⁾ 成ったというこの論文の中で、三宅は、“今沢慈海先生の業績” について先ず言及している。それによると、“参考事務という語が日本の文献に始めて現れたのは大正 13 年 3 月の“図書館雑誌”に当時東京市立図書館長 [正しくは館頭] であった今沢慈海先生が発表せられた“参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務”と題する研究で……”⁵⁸⁾ あり、その根拠を示すとともに、研究の内容も紹介している。次に、同じ頃発表された研究として、“日比谷図書館に於ける参考事務 (小谷) 図書館雑誌、大正 13 年 3 月”⁵⁹⁾ と“参考書の採 (波多野) 同上 同年 4 月 [正しくは、図書館研究 (芸艸会)、大正 13 年 7 月、12 月、14 年 11 月]”⁶⁰⁾ とをあげた後で、当時のわが国の図書館におけるレファレンス・ワークの現状にふれて、次のように述べている。

昭和の初め頃上野の帝国図書館には出納室の片隅に“読書相談”の看板をあげたコーナーが設けられて専任の係員が読者の質問に答えていた。従ってこの種の仕事は日比谷流では参考係、上野流では読書相談係の名で呼ばれて来たのが発祥時代から終戦時までのこと…⁶¹⁾

さらに、“毛利宮彦氏の研究”⁶²⁾ “波多野賢一氏の発表”⁶³⁾ “渋谷国忠氏の労作その他”⁶⁴⁾ についても、それぞれの内容等を紹介しているが、波多野の発表については、それが、昭和 3 (1928) 年 12 月の京都における日本図書館協会の大会でなされたことを指摘して、“こうした

多人種会合の席での参考事務に関する講演は我国最初の記録であろう。”⁶⁵⁾ と述べている。また、渋谷については、その論文「参考事務要論」の内容にふれた後で、“……一応戦前のこの種の研究に終止符を打ったものと見てよい”⁶⁶⁾ と述べている。

三宅が、この論文を草して得た結論は、次のようなものである。

……“我国の参考事務”は曲りなりにも、国情にそって発達して来たと見るべきであるが、遺憾ながら我国の群小図書館の殆んどは人員の不足から、重要スタッフが図書の選択、購入乃至は分類、目録の事務に追われ、出納室に出て読者の相談に答える暇がないといった実状であった。従って読者に直面する所謂現業の仕事は読者が要求する図書を出し入れする極めて原始的な、消極的な作業でしかなく又積極的に参考事務に従事する事の出来る有能者を配置出来ない図書館が多かった……⁶⁷⁾

利用者に直接接するこの種のサービス様式を、“所謂現業の仕事”と呼んだ三宅のことは、彼が、第 2 次世界大戦前の図書館勤務の経験を有し、その頃の実情を知る人であるだけに、当時レファレンス・ワークが図書館の業務の中で、どのような位置にあったかを伺わせるものといえよう。

その後、昭和 29 (1954) 年には、神戸市立図書館長の志智嘉九郎が『レファレンス—公共図書館における実際—』を著わして、三宅が先の論文であげた人々と、その研究とを紹介している。また、神戸市立図書館のレファレンス・ワークについてもふれて、“……日比谷図書館にならって、それと同じような事をその頃 [大正時代末期] に実施していた。その記録が現存している。”⁶⁸⁾ と述べている。さらに、第 2 次世界大戦前のレファレンス・ワークが十分発展しなかった原因として、次のような点を指摘している。

図書館学はいうまでもなく経験を基礎とする学問である。経験を唯一の基礎とする学問である。従って図書館学において追求される理論は直ちに実務に役立たねばならないし、逆にまた実務によってその理論が発展して行くのである。レファレンスに関する戦前の研究には右のような意味において実務の裏付けが乏しかった。⁶⁹⁾

わが国におけるレファレンス・ワークの発展に関しては、これらのほかにも、昭和 34 (1959) 年に、北島武彦が『図書館雑誌』で、⁷⁰⁾ 昭和 35 (1960) 年に、木寺清一と鈴木正次が『LIBER 資料篇』で⁷¹⁾、それぞれ文献をリストしている。また、武居権内もその著『日本図書館学史序説』(昭和 35) の中で、今沢慈海から佐中茂に至るまでのいくつかの研究について言及している。⁷²⁾

昭和 37 (1962) 年、志智は、前掲『レファレンス—公共図書館における実際—』の改訂版ともいえるべき『レファレンス・ワーク』において、レファレンス・ワークの発展を実際面と理論面とに分けて叙述し、今沢等の説に加えて、新たに田村盛一の説を紹介している。⁷³⁾ 志智はまた、この中で小谷誠一の「図書館に於ける参考事務」(大正 15・4) を引用して、レファレンス・ワークがわが国にもたらされたのは、大正時代の初期であり、それを実行に移したのは、日比谷図書館であったと述べている。⁷⁴⁾ しかし、そのすぐ後で、次のような疑問を投げかけている。

……小谷誠一氏の「図書館に於ける参考事務」によれば日比谷図書館では大正 4 年以来参考事務を実施していたとのことである。されば今沢氏の所論は日比谷図書館における参考事務開始後 9 年を経た後ということになり、理論的な研究のいち早く行われるわが国図書館界の伝統に著しく反すると言わねばならないが、この辺の事情は果してどうであったか。⁷⁵⁾

志智の『レファレンス・ワーク』は、昭和 30 年代のわが国における最もすぐれたレファレンス・ワークの教科書として、第 2 次世界大戦後のこの分野に関する研究をまとめることに成功している。三宅千代二の強い影響は拭うべくもないが、決してその繰り返しに終りはしなかった。三宅の研究が、その後に大きな影響を及ぼすものであったと同様、志智の著作も、その影響力は強かったのである。

昭和 44 (1969) 年は、わが国のレファレンス・ワーク発展史上、ひとつの記念すべき年となろう。レファレンス・ワーク関係のめばしい著作が、相次いで出版されたからである。先ず 4 月には、長沢雅男著『参考調査法』⁷⁶⁾ が出版され、7 月には、佃実夫著『文献探索学入門』⁷⁷⁾ の出版をみた。

いずれも、わが国におけるレファレンス・ワークの発

展について考察を試みているが、佃の場合には、三宅等の影響を受けながらも、若干それらとは異った見解を示している。すなわち、今沢慈海、波多野賢一、渋谷国忠の説を紹介して、“三説とも、レファレンス・ワークの定義というより、その解説というべき、啓蒙的にかかれたものである。”⁷⁸⁾ と述べているし、また、次のようにもいっている。

日本でも戦前すでに、レファレンス・ワークに近い考え方があり、上野の帝国図書館や日比谷図書館で試みられたことがある。——が、今日の概念でいうレファレンス・ワークは、……一九五一年の第二回図書館専門職員講習会で、レファレンスの講座を担当したチェニー [F. N. Cheney] によって導入された。⁷⁹⁾

このような佃の見解は、既に定義のところで述べた、第 2 次世界大戦前のレファレンス・ワークに関する考察を欠くものであり、妥当であるとはいえない。

これと似たような考え方をする人々は案外多く、わが国の図書館界全体を支配しそうな気配さえ伺える。『図書館界』第 50 号 (昭和 34・8) の特集に、「図書館奉仕」と題する論文を寄せた木寺清一も、そうした中のひとりである。彼は、「図書館奉仕 (サービス)」は“戦後の産物”であると強調し、レファレンス・ワークについても“日比谷、上野等の外、ほとんど問題にもならなかった戦前の状態……”⁸⁰⁾ と述べている。こうした人々の見解が、実は三宅等の研究に基くものでありながら、そうした以前の研究の域を一步も出なかったということは、わが国の図書館界にとって、決して喜ばしいとはいえないだろう。

昭和 44 (1969) 年 7 月には、北島武彦編著『図書館奉仕論』も出版された。この中の第 IV 章は、“レファレンス・サービス”にあてられ、北島武彦が執筆している。⁸¹⁾ しかし、わが国におけるレファレンス・ワークの発展に関する部分の記述は、その多くが、先に紹介した志智の『レファレンス・ワーク』によったものであり、新しさは見られない。⁸²⁾

こうした中であって、ひとり長沢雅男のみが異色であることは、既に述べた。彼の『参考調査法』は、昭和 39 (1964) 年に出版された『参考調査活動序講』⁸³⁾ が発展して誕生した、ふたつの著作のうち的一方にあたり、もう一方の『参考調査資料概説』(昭和 42)⁸⁴⁾ とは、姉妹関

係をなすものである。

『参考調査法』では、新たに、大学図書館におけるレファレンス・ワークの発展がとり上げられ、第2次世界大戦前においては、“わずかに東京帝国大学附属図書館に参考掛が設けられていたことが知られている程度である”⁸⁵⁾。と述べている。しかし、惜しむらくは、典拠資料が明らかにされていない。⁸⁶⁾

さらに、長沢は、公共図書館におけるレファレンス・ワークの発展について、“大正4年以来、日比谷図書館で図書調査係を置いていた……”⁸⁷⁾と述べているが、これは、例の小谷誠一の論文「図書館に於ける参考事務」(大正15.4)を無批判に受け入れたもので、先に紹介した志智嘉九郎の指摘する疑問点を斟酌したものではなかった。

このように、いくつかの問題点を有するとはいうものの、長沢が、わが国におけるレファレンス・ワークの発展を、明治時代末期のレファレンス・ワークの紹介や必要性強調の時代から論述している点には、大いに注目しなければならない。当然のことながら、この種のサービス様式が、ある日突然、わが国に移入され、実施され始めたとは思えないからである。

以上、昭和26(1951)年の三宅千代二の研究から、昭和44(1969)年の長沢雅男の著作まで、わが国におけるレファレンス・ワークの発展に関するいくつかの研究を概観して来たが、結論としていえることは、既に何回か指摘したように、いずれも不十分なものばかりであるということである。第1番に指摘されなければならないのは、以上の研究が典拠とした文献は余りにも少ない数であったということである。特に、第2次世界大戦前の文献に対する認識不足は、以上の研究の信ぴょう性を失わせる上で、決定的な役割を演じている。多くの研究が典拠とした文献の大部分は、『図書館雑誌』に掲載されたものであるが、それとても、ほんの一部の記事に過ぎ、たくさん有用な記事が見落されている。

こうした文献の問題には、わが国の場合、図書館や図書館学分野の書誌・索引類の不足という問題が絡んでいて、一概に、以上の人々を責めることはできないかもしれない。⁸⁸⁾しかし、彼らの多くが、文献を探し出す努力を怠ったと思われるのは、歴史とか先達の業績とかいうものに対する彼らの考え方が筆者とはまるで異っているためではなくて、そういうものに対する情熱の差であろうと思われる。結果としてどうあれ、やはり、ある程度の文献を実際に検討したものでなければ、他人をも納得

させることはできないであろう。彼らが自他ともに認める図書館人であるだけに、この点いっそう遺憾に思われてならない。

過去における諸研究を概観して、わが国においては、第2次世界大戦前のレファレンス・ワークに対する研究が不十分なことを述べて来たが、本稿では、以上の人々の研究に基づいて、とりわけ研究のたち遅れを感じさせるレファレンス・ワークの紹介期、およびその後の強調期を論述する。それは、年代的には、明治初年から大正9(1920)年までであり、大正9年から10年頃を境にして、レファレンス・ワークは、全国的規模での普及段階に入っていくものと思われる。従って、大正10(1921)年以降の発展については、本稿では扱わない。

明治時代の初めからレファレンス・ワークの発展を記述しようと試みる理由は、この種のサービス様式の紹介と、近代的図書館の建設とが並行して進められたものと考えられることである。明治時代初期の何年をもって、その初めとするかは、たいへんむずかしい問題である。本稿では、一応明治初年として、1868年から扱うことにしたが、最初の人的援助の紹介事例は、明治9(1876)年のものである。

ここで、江戸時代以前の非公開私有文庫における人的援助についてふれておきたい。西洋の近代的図書館制度がわが国に移入される以前にも、図書館的なものは存在した。そして、そうした‘図書館’の中で、非常に限られた利用者が、その場を管理する人間から、時により何らかの人的援助を得ていたことは容易に想像されよう。しかし、公衆による利用よりも特定個人の利用、もしくはは当時においては、比較的少数しか存在しなかったであろう印刷物・手写本等の保存を目的として設けられたこれらの‘図書館’における人的援助の提供は、本稿の対象とはならない。その理由の第1は、現在の企業体等における専門図書館とは別の意味で、人々の利用が、一般に不可能だったことである。もうひとつの理由は、既に述べたごとく、本来、人的援助は物的援助とあいまって初めて有効なものであり、そうした援助に対する十分な知識や備えもないままに、非常にまれに、しかも極く限られた場合に、人的援助がなされたと思われることである。

ところで、第2次世界大戦前におけるレファレンス・ワークの発展をひとりの人間の生涯にたとえるならば、本稿において論述する部分は、さしずめその幼年期というところであろう。しかし、故人の伝記は、その全生涯を通して書かれるのが普通であり、幼年期のみの記述に

終わることはまれであろう。全生涯にわたる伝記となつてこそ、意義のあるものとなるのである。また、この種の論文が、本来、一貫した方針のもとに記述されるべき性質を有していることを考えれば、青年期以降の発展を論ずる責務も、筆者に課せられているとみるべきかもしれない。

さて、第2次世界大戦後のレファレンス・ワークが、第2次世界大戦前のそれと系譜を異にするものでないことは、既に指摘した。しかし、戦後におけるレファレンス・ワークの発展は、現在に直接つながるものとして、一論文を構成するに十分な材料を提供してくれるであろう。第2次世界大戦の敗戦は、明治維新以上に、人々の知る権利の拡大に貢献があったものと思われる。その意味で、戦後のレファレンス・ワークの発展も、信頼するに足る資料に基づいて、早晚記述されなければならない。

本稿の記述の対象となる図書館は、帝国図書館、公立図書館、および大学・高等専門学校図書館である。帝国図書館は、現在の国立国会図書館支部上野図書館の前身をいう。公立図書館は、道府県もしくは市町村等によって設立され、かつ維持されている図書館で、有料・無料のいかにかわらず、一般に公開されているものをいう。大学・高等専門学校図書館は、官立大学付属図書館、私立大学図書館、高等専門学校図書館もしくは図書館をいう。これらの図書館は、第2次世界大戦前にあっては、しばしば、学校図書館と呼ばれていたが、今日の学校図書館法⁸⁹⁾の定義するものとは異なる。

ところで、Louis Kaplan は、近代的レファレンス・ワークの特徴は、次の4点にあると述べている。

1. 一般に、図書館員にレファレンス・ワークを行なおうとする意志とそのための能力とがあること。
2. レファレンス・ワークを行なう専任の、もしくは大部分の時間をそれに費せる担当者がいること。
3. レファレンス・ワーク用に設計された部屋の公開書架に、参考図書等の資料が配架されていること。
4. (辞書体目録や精密な分類法のような) 図書館の資料を容易に探索できる種々のツールが備わっていること。⁹⁰⁾

また、長沢は、わが国の各種図書館に共通と思われる、

レファレンス・ワーク発展の阻害要因について分析し、次の5項目を指摘している。これらは、主に第2次世界大戦後の状態に関して述べたものであるが、第2次世界大戦前についても、示唆に富むものといえよう。

1. 図書館の性格
2. レファレンス・ワークに対する理解
3. 利用者の問題
4. 担当者の問題
5. レファレンス・ツールの問題⁹¹⁾

Kaplan の場合と長沢の場合とでは、分析の対象となった図書館のサービスの水準に大きな差があり、そのために、後者は、前者の問題にしなかった1と3を指摘しているが、ほかの項目については、ほぼ同じことを述べたものと思われる。表現の相違は、観点の相違によるものである。

本稿では、これらの指摘のうちの、物的援助に関する項目を除いた残りの項目に着目して、わが国における初期のレファレンス・ワークの発展を記述して行く。目録や分類、レファレンス・ツール等の発展は、興味深い問題であり、レファレンス・ワークの発展にも多大の影響を及ぼした問題であると思われる。しかし、それらを本稿で扱うことは、記述の対象を増々広くすることであり、的確な記述はいよいよ困難になるであろう。それらは、レファレンス・ワーク以上に様々な問題を含み、多数の独立した論文を生む可能性を有しているように思われる。

C. 資 料

本稿が典拠とする資料は、文献に限られる。既に述べたように、文献の問題は、あるものの発展をたどろうとする時、先ず、念頭に置かなければならないものである。それだけに、何よりも筆者を悩ませた第1の問題であった。こういったテーマを扱う者にとって、文献不足をかこつのは、一種のならわしなのかもしれない。しかし、筆者の場合には、それ以上に問題があった。書誌・索引類の不足、特に蔵書目録の不備は、大きな問題であった。勢い、セレンディビティーによらざるを得ない面があったことも事実である。およそ、他人の文献探索などを気軽に手伝っている者がするはずのない作業を、再三繰り返したのである。Samuel Rothstein⁹²⁾ や Anthony Thomas Kruzas⁹³⁾ とは異なった、‘持たざる国’の悩みがあったことをつけ加えておきたい。⁹⁴⁾

このような文献の不足をどうやって補って行くかは、今後の課題である。当時を知る人々に直接面接して、尋ねる等の方法が考えられるだろう。但し、この方法は、あくまでも補足的に採用されるべきであることを強調しておく。これを無視すると、歴史的研究としての価値と信ぴょう性を著しくそこなうことになるからである。

それはともかくとして、次に、本稿で使用した文献についてふれる。先ず、中心となった1次的文献としては、図書館およびその関係機関等による各種の報告、各図書館の館報、図書館専門誌および図書館関係誌の記事を使用した。他に、若干の文学作品等を含む。2次的文献としては、後になって書かれた、このテーマに関係する各種の研究論文、各図書館の館史等を使用した。

本稿の冒頭でも述べたように、この種のサービス様式の発展は、図書館の側と利用者の側の両面から検討されるべきである。しかし、本稿では、主として図書館の側から書かれた文献を使用した。これは、一面やむを得ないことでもあった。

II. 近代的図書館の建設と“人的援助”

の紹介 明治初年—明治39年

今からおよそ100年前、わが国は、開国、明治維新、文明開化と続く時代の中で、押し寄せる西洋文明の波をまともに受けながら、その吸収にやっきとなっていた。一方ではまた、海外へも度々人を派遣して西欧諸国の実情を視察させるなど、西洋文明の移植に迫られていた。

万延元(1860)年、文久2(1862)年の2度にわたって、米国および欧州を訪問した福沢諭吉は、『西洋事情初篇』を著わして“商人会社,”“学校,”“新聞紙,”“病院,”“博物館,”“蒸気機関”等を紹介するとともに、“文庫”についても述べた。

一 西洋諸国の都府には文庫あり。「ビブリオテーキ」と云ふ。日用の書籍図画等より古書珍書に至るまで万国の書皆備り、衆人來りて随意に之を読むべし。但し毎日庫内にて読むのみにて家に持帰ることを許さず。……文庫は政府に属するものあり、国中一般に属するものあり。外国の書は之を買ひ、自国の書は国中にて新に出版する者より其書一部を文庫へ納めしむ。⁹⁵⁾

これが、わが国に紹介された西洋の近代的図書館の初めである。⁹⁶⁾ この福沢の紹介が、当時のわが国に与えた

影響についてはいろいろと議論されているが、次のことは一般にいえよう。

かれ[福沢諭吉]が「ビブリオテーキ」として紹介した図書館は、……おりからイギリスなどで勃興しつつあった民衆のための無料公共図書館ではなくして、欧州諸国の代表的な官立図書館、すなわち学者、著述家、研究者を主たる利用対象とする学術研究のための、国家の文化的中心としての図書館であった。これは、……わが国民の間に図書館なるもののイメージを与えるにあたって決定的な影響を与えるものであった。⁹⁷⁾

その後、明治3(1870)年には、福沢諭吉の下で慶應義塾の経営にあたっていた小幡基三郎が、『西洋学校軌範』を訳述して、“書庫「リブラリー」”を紹介した。

大学校ノ書庫ハ五千巻ノ書ヲ貯ヘ、殊ニ神学ノ書類ニ於テ有価ノモノ多シ。「エノシアン」「ヒロヘリアン」ノ社中ニ属スル書庫ニハ、凡ソ三千巻ノ書アリテ、歴史詩文等ノ書類多シ。又議事院其他政府諸省ニ附属ノ書庫アリテ、生徒ニ書籍ノ便利ヲ得セシムルヲ少カラズ。⁹⁸⁾

ところで、わが国が徳川幕府の長い封建体制の眠りから覚めて、国をあげての近代化と取り組み始めた頃、太平洋を隔てた米国では独立100年を迎えようとしていた。19世紀後半の米国図書館界は、公共図書館の全国的普及と国力の充実にもなって、次の発展を目指す新しい段階に入っていた。1876年、独立100年にあたるこの年、米国図書館協会(A.L.A.)が結成され、第1回全米図書館大会はフィラデルフィアに開催された。前章でふれたS.S. Greenの発表は、この大会においてなされたものである。また、教育局から出版された分厚い報告書*Public libraries in the United States of America*⁹⁹⁾は、米国における図書館の歴史の変遷、現状に関する多くの論文と、図書館の管理運営に関する有用な論文とを掲載していた。それらはいずれも当時の一流の図書館人によって執筆され、示唆に富むものが多かった。この報告書が米国におけるレファレンス・ワークの発展に与えた影響について、Louis Kaplanは3人の論文を指摘している。¹⁰⁰⁾ それによると、先ず第1はA.R. SpoffordがList of the principal books of reference important

to be used in libraries”と題して当時の参考図書を紹介し、それらの開架による利用を強調した論文¹⁰¹⁾を載せたことである。第2は、後に図書の分類に変革をもたらした Melvil Dewey の十進分類法に関する論文¹⁰²⁾が含まれていたことである。第3は、目録の歴史的変遷をたどって辞書体目録の利点を明らかにし、それがクイック・レファレンスに適していることを指摘した C.A. Cutter の論文¹⁰³⁾が発表されていたことである。さらにこの年には、*Libray journal* が創刊された。それは図書館人に意見交換の場を提供し、図書館学の発展と図書館技術の普及に大きく貢献することになった。

1876 年は、わが国では明治 9 年にあたり、フィラデルフィアにおける万国博覧会等を視察のため、文部大輔田中不二麿等が米国へ派遣された。帰朝後一行は、『米国百年期博覧会教育報告』全 4 冊を出版した(明治10.1)が、その第3巻には“書籍館”の項目が盛り込まれていた。さらに12月、田中不二麿は「公立書籍館ノ設置ヲ要ス」という意見を発表して、図書館の重要性を訴えた。その後明治 21 (1888) 年、田中稲城は文部省から図書館研究のため米英へ留学を命ぜられ、23 年に帰国した。

日本図書館協会の前身である日本文庫協会が東京に創立されたのは明治 25 (1892) 年であり、翌 26 年には太田為三郎の手になる和漢書目録編纂規則の成案を審議決定し、印刷頒布した。また、明治 33 (1900) 年には京都に関西文庫協会が設立され、翌年わが国最初の図書館専門雑誌『東壁』¹⁰⁴⁾の創刊をみるようになった。この時代に出版された図書館に関する主な著作としては、西村竹間著『図書館管理法』(明治 25) や文部省編『図書館管理法』(明治 33) などがある。

しかし、何よりも先ずこの時代を特徴づけるものは、江戸時代以前の非公開私有文庫から社会的公立公開図書館への移行と、保存本位から利用本位を目指す図書館への進展がなされたことである。図書館設立の動きに注目して、この時代の図書館界を概観すると次のようになる。先ず明治維新から 10 年にかけて新聞縦覧所が起り、10 年から 20 年には書籍館が設立され、続いて 20 年代に入ると教育会経営の図書館が多くなり、30 年の貴族院における「公立図書館費国库補助法」案の上程、32 年の図書館令公布等と相まって、公立図書館がようやくわが国にも定着し始め、次の 40 年代を迎えることになるのである。¹⁰⁵⁾

一方、明治 5 (1872) 年に公布された学制に端を発するわが国の教育の近代化は、やがて学校教育の隆盛をも

たらし、この時代の終りには義務教育学校の子どもたちの就学率を 100 パーセントへと近づけていた。

A. 欧米留学生による“人的援助”の紹介

1. 目賀田種太郎とハーバード大学図書館

徳川幕府の封建体制が崩れ出し、長い鎖国政策が終りを告げると、わが国には西洋の近代文明が洪水のように流入して来た。先に述べた福沢諭吉の『西洋事情』は、こうした時期に生まれたものである。そして、以後わが国は、あらゆる点で西洋文明を模倣し、新しく出発しようと努めるのである。

特に、明治維新をきっかけとして、こうした動きはいっそう活発となり、欧米へ留学する者は著しくその数を増した。そうした中であって、後の男爵目賀田種太郎は、明治 3 (1870) 年米国へ留学を命ぜられ、7 年にはハーバード大学法科を卒業して帰国した。そして、翌年再び渡米し、明治 12 (1879) 年に帰国するまで在米国留学生監督として活躍した。

明治 9 (1876) 年、目賀田は「監督雑報第十二号」において、米国の図書館事情を報告したが、それは『教育雑誌』に転載された¹⁰⁶⁾。その中で目賀田は、公共図書館に寄せられる寄付金の額が大きいこと、『書籍館雑誌』¹⁰⁷⁾のこと、1876 年の“ヒラデルヒア府博覧会ノ時ニ際シ”開かれた“書籍館長集会”¹⁰⁸⁾のこと、その集会でとり上げられた議事、たとえば“如何ナル看者ノ需求ニ応ズベキヤ”¹⁰⁹⁾のこと、“近頃又万国書籍館長ノ集会ヲ設クルノ議アルニ至レリ”¹¹⁰⁾ということなどを述べている。また、“ボストン府ノ公立書籍館”¹¹¹⁾の活動状況について説明し、さらに“ケンブリッジ、ハーバート”大学図書館についてもふれて、次のような紹介をしている。

……特ニ便利ナルモノハ諸疑ノ質問ニ答フルノ方法ナリ。例ヘバ茲ニ人アリテ或事ヲ質問セント欲セバ、之ヲ質問書ニ記シテ館中ニ掲グベシ、而シテ館中ノ諸人其答ヲ為サント欲スル者アレバ、之ニ其答弁ヲ記入ス、又其質問者ハ其姓名ヲ記シ、或ハ預メ書籍館ニ取リ置キタル姓名ニ対スル番号ヲ記スガ故ニ、其姓名又ハ番号ニ由リテ書籍館ニ紹介シ、或ハ直ニ其答弁者ニ紹介スルノ便宜ヲ与フルヲ有ルガ如シ。¹¹²⁾

ここに紹介されているのは、当時 Justin Winsor がハーバード大学図書館で行なっていたサービス様式のことであろう。¹¹³⁾それはともかくとして、目賀田が

特にこのサービス様式を便利なものとしてとり上げた理由は、何であつたろうか。ハーバード大学在学中か、留学生監督としての滞米中かは不明であるが、いずれにしても彼は、ハーバード大学図書館を訪れ、こうしたサービス様式の詳細な説明を受けたものと思われる。そして、留学中の図書館利用の経験から、もしくは勉強中に遭遇した種々の疑問を解決する方策として、こうしたサービス様式が便利なものと感じたのであろう。彼が留学中にどの程度図書館を利用し、当時のハーバード大学図書館からどのような印象を受けていたかは、はっきりと知ることができない。しかし、彼がハーバード大学図書館の紹介を、単なる建造物等の紹介に終わらせなかったという点は、大いに注目されるべきであろう。

では、この報告に対する当時のわが国図書館界の反響は、どうだったのであろうか。この点に関して、竹林熊彦は次のように述べている。

「当時文部省ノ「教育雑誌」ハ、相当ノ範圍ニ頒布セラレタイタ事実ト、ソノモツ權威トカラシテ、此ノ記事ガ、ソノ時代ノ圖当事者ハ言フニ及バズ、教育当局者ニ対シテモ、啓蒙的価値ノ大ナリシコトハ、コレヲ断言スルニ憚ラヌ。タダ当時ノ教育方針ガ、今日ト同ジク、学校教育ニ重点ヲ置キシタメ、折角発生ノ運ビニ至リタル私設圖ハ勿論、相当ノ施設ノ公立圖スラ、学校教育ノ重圧下ニ、閉鎖セラルルニ至リシハ、無理カラヌコト同情ニ堪エヌ。随ツテ目賀田男爵ノ記文ノ啓蒙的価値ガ、甚ダ重大ナリシニ拘ハラズ、實際上ノ效果ハ見ルベキモノナク、加之コレヲ忘却ノ裡ニ葬リ去リシニ至ツテハ、目賀田氏ノ折角ノ努力ニ対シテ、甚ダオ氣ノ毒ニ感ズル次第デアル。¹¹⁴⁾

目賀田の報告が大きな啓蒙的価値を有するものだったにもかかわらず、実際上の効果がなかった原因を当時の教育方針に求めた竹林の見方の適否は別として、学制公布後間もないわが国が、学校教育の普及・充実に追われていたことは事実である。

ここに紹介されているようなサービス様式を実施するためには、何よりも先づ図書館が必要であり、それを採用する図書館員がいなければならない。そして、こうしたサービス様式をとり入れるよう要求し、実際に利用する人々のいることが不可欠の要素である。然るに、当時のわが国図書館界は、新しい出発を目指して準備中であ

り、近代的図書館と呼ばれるにふさわしいものは皆無といつてよい状態だったのである。もちろん、図書館員という職業を誇れるような時代ではなかった。従って、利用者の図書館に対する認識は極めて低く、それに期待を寄せるような人々も稀だったのであろう。また文部省等、政府の認識が低かったことも指摘されるだろう。

こうした、図書館に対する認識の問題は、明治の初年だけに限られたものではなく、図書館の側の宣伝のまずさや教育制度の問題とも絡んで、程度の差こそあれ、第2次世界大戦前を通じて指摘できるのである。しかもそれは、戦後の社会情勢の大きな変化や一部図書館員の懸命な努力にもかかわらず、今日なお完全には解決されていない問題なのである。

2. 湯浅吉郎とエル大学図書館

明治35(1902)年の『東壁』第4号(終刊号)には、京都帝国大学法科大学講師湯浅吉郎の講演が掲載されている。「エル大学の図書館につきて」¹¹⁵⁾と題するものであるが、恐らく米国留学中の体験談であろう。“（三）新聞雑誌閲覧所”では、そこに働く記憶力のすぐれたひとりの老人を次のように紹介している。

……また館長とも閲覧掛とも只一人の老人がおる。此老人は博言学者とよばるゝほどあつて、何処の国語にも通じ、いかなる問題に關係したる記事でも、雑報でも、直に出してみせる。活ける目録とは此人のことである。¹¹⁶⁾

関西文庫協会は、機関誌『東壁』を明治34(1901)年4月に創刊したが、結局4号を出しただけに終わった。湯浅のこの講演のほかにも、欧米の図書館について述べたものは、『東壁』中にいくつか見られるが、このようなサービス様式を特に取り上げたものはない。欧米の図書館やそこでのサービス様式についてふれた数々の文献の中で、“活ける目録”もしくはそれに類する語を使ったものとしては、湯浅のこれが最も古い文献といえるだろう。“活ける目録”というのは、物理的存在としての目録(カード目録とか冊子体の目録)に対することばで、人的援助のひとつの形式とみることができよう。それは、図書館の利用に慣れていない人々に対して、有効に作用したであろうし、また目録を補う働きをも兼ねていたと思われる。いずれにしても、この種の人的援助は、長年月の経験を有する図書館員や、並みはずれた記憶力を有する図書館員によって、全く個人的に行なわれたもので

ある。それだけに不安定なものであり、またその図書館員一代限りのサービスであったといえよう。米国議会図書館における Ainsworth R. Spofford の例は、その代表的なものといえるだろう。¹¹⁷⁾

ところで、この講演が関西の図書館関係者に、あるいはまたその他の地方の図書館関係者に、どのような影響を与えたかは必ずしも明らかではない。しかし、湯浅はその後図書館界とのつながりを深くした人である。すなわち、『東壁』の終刊号が出されたこの年、彼は欧州および米国へ図書館事情視察のため赴き、翌明治 36 (1903) 年帰国した。そして、京都府立図書館長となった。

半月の名で知られる明治・大正期の詩人であり、ヘブライ学者でもある湯浅吉郎は、こうしてわが国図書館運営の近代化に努力することとなった。明治 18 (1885) 年、同志社を卒業後米国に渡り、オベリン大学、エール大学で神学、ヘブライ語を学んだ彼が、留学中の図書館利用をきっかけとして、次第に図書館界へ身を投じて行ったという事実は、当時の図書館界の指導者が、いかなる理由や動機で図書館に関係するようになったかを知る手がかりとして、改めて注目してみる必要がある。¹¹⁸⁾

さらに、彼が群馬県安中の生まれであることも興味深い点であろう。明治 5 (1872) 年には、湯浅治郎によって無料の公開図書館が設立されているからである。便覧舎と呼ばれるこの図書館は、湯浅治郎の私費を投じて建物が作られ、和漢書 3,000 部余りを所蔵していたといわれる。便覧舎設立当時 10 代のなかばであった湯浅吉郎が、この図書館からどんな影響を受けたか知る術はないであろうか。

なお、京都府立図書館長としての湯浅吉郎の活躍やその後の図書館界との関係は、次章で改めてふれることにする。

3. 正木直彦の意見

明治 25 (1892) 年に創立された日本文庫協会は、それ以後数多くの例会を重ねた。『図書館雑誌』が創刊される前の時期に開かれた例会において、どのような話し合いや講演が行なわれたのかは、逐一明らかではない。しかし、明治 37 (1904) 年 11 月 26 日に東京美術学校文庫で開かれた例会の様子は、『私立成田図書館報告』第七によって、ある程度伺い知ることができる。それには、“新帰朝者たる美術学校長正木直彦氏の演説要旨”¹¹⁹⁾が掲載されている。正木直彦は、明治 34 (1901) 年から昭和 7 (1932) 年まで東京美術学校長の職にあり、明治 40 (1907) 年には文展の創設に参画するなど美術界との関係が深か

った人である。

図書館及館員に対する希望にして、時々欧米図書館の実例を引證せられ、冒頭に図書館の蔵書は銀行に於ける資金の如きものなれば大に運転活動を要す、之をして十分活動せしむることは其管理者の手腕如何に在り、其活動方法として

第一に閲覧者に向て親切なるべきこと、例せば或事項を調査する場合に於て図書館自ら之を指南すること、学校機関の図書館に於て殊に其必要を見る、学校図書館にては『カード』よりも活きたる目録を要す、是れ学生に読書の嗜好を養成せしむる第一良法なればなり。¹²⁰⁾

これは、正木が欧米の図書館を見学し、種々の説明を受け、恐らくは実際に利用してこの種のサービス様式の便利なことを知った上での発言であろう。

ところで、正木の意見には、人的援助の必要性を強調するあまり、物的援助である検索用具としてのカード目録を軽視するような部分がみられる。これは、理想的な図書館サービスの発達を目指すという観点からは、明らかに誤解であると受けとられよう。しかし、当時の学校図書館（今日の大学図書館に相当すると考えてさしつかえない）¹²¹⁾の実情は、それほどみじめなものだったのである。次にあげる赤堀又次郎のことばは、その辺の様子を的確に表わしたものといえよう。『日本文学者年表』（明治 35）の編纂に手をつけ始めた頃だというから、明治 10 年代の後半以後のことを述べたものと思われる。

此頃は書物を見ることが極めて不自由でした。書名を知ることさへ容易ではなく、書名を知っても其書を見ることはなほさら困難でした。其頃は所蔵の様子が今とは違ってゐて、一個人の所有になってゐたものが多かったのです。図書館といふべきものは、東京府下にまづ三ヶ所だけで、他地方でもなかったでせう。府下の三ヶ所といふのは東京書籍館、博物館、東京大学三学部図書館とです。……大学のは今の法文科の本館の二階の北の方で書庫と閲覧室とを兼ねてゐた程で、なほ貧弱なものでした。明治二十年頃に今の図書館の建物が出来て、何かの事が急に善くなりました。……併し其頃には、大学では、書目が不思議に不整頓なもので、甚だ搜索に難儀しました。其難儀に堪へられずして自分だけの用

に書目の整理にかゝったものゝ一が、あの年表の初稿です。¹²²⁾

このような事情にあった当時の図書館において、時として一部の図書館員による特別な人的援助の提供があったとしても、それは極く稀なできごとであり、長続きは無論のこと、他の図書館員に影響を及ぼすことのできるものではなかったのであろう。

人的援助がある程度継続して行なわれるためには、利用者が必要であり、利用者の要求に応じられるような体制を整えておかねばならない。目録などによる物的援助は、やはりどここの図書館でも欠くべからざるものである。こうした、最低限必要なものを備えないままに、その場その場の思いつきで利用者の要求が処理されたとしても、その効果は何ら累積されるものではなく、従って利用者の支持につながることも少なかったであろう。

B. 帝国図書館の変遷と“人的援助”の提供

明治 5 (1872) 年、文部省博物館局所管の下に、東京湯島の聖堂内に開館した書籍館は、明治 8 (1872) 年には東京書籍館と改められたが、2年後には西南戦争のしわ寄せから廃館となった。しかし、これは東京府がひきつぐことになり、東京府書籍館として明治 13 (1880) 年まで運営された。そして、この年再び文部省に移管され、その名も東京図書館と変わった。その後、明治 18 (1885) 年には上野公園の東京教育博物館構内に移転され、東京教育博物館と合併した。しかし、翌年東京図書館官制の公布によって独立し、明治 30 (1897) 年 4 月 22 日、勅令第 110 号をもって帝国図書館官制が公布されたことにより、帝国図書館として出発することとなった。こうして、上野に帝国図書館の建築が決まり、4 期に及ぶ建築計画の第 1 期工事は、明治 39 (1906) 年に完成した。

帝国図書館の設立経過とそれにかかわる複雑な事情とは、わが国における近代的図書館の生みの苦しみを象徴するものであり、図書館に対する政府の認識の変化を表わすものとして興味深い。

所轄官庁の変化や館名の変更とは別に、帝国図書館のサービスは次第に改良が施され、施設も序々に充実して行った。先に引用した赤堀又次郎も、“東京書籍館は、御茶水から上野へ遷りて、帝国図書館となり、目録なども漸次整頓しました。”¹²³⁾と述べている。こうした図書館内部の充実・改善には、明治 23 (1890) 年米英での図書館修業をおえて帰国した、田中稲城の指導と努力があったからにほかならない。

1. 田中稲城の活躍

明治 23 年、帰国した田中稲城は東京図書館長を兼任し、28 年からは専任となった。そして、明治 33 (1900) 年には文部省から嘱託されて『図書館管理法』を執筆し、米英における勉学の成果を披露した。田中は、この中の“第十三 雑誌及び参考書”において、次のように“参考書”の説明をしている。

常ニ参考ニ供スルノミニテ之ヲ読ムニ非ル一種ノ書籍アリ之ヲ名ケテ参考書ト云フハ定時刊行物ト同ク手軽ク出納シ得ベキ陳列ヲ為シ置クベシ蓋シ其多クハ大ニシテ且ツ重キ書籍ナレバ運搬ニ便ナラズ即チ字書、人名字書、地学字書、地図、百科字典並ニ雑誌索引ノ如キモノ是ナリ……¹²⁴⁾

さらに、これらの利用を促すという立場から、“……事務都合ノ許ス限りハ青年読者ノ為ニ搜索ノ勞ヲ取り成ルベク彼等ヲシテ之ヲ慣用スルニ至ラシムベシ”¹²⁵⁾と続けている。これは、単に出納が手軽にできるからという理由で、参考図書、書誌・索引類等を出納台の近くに並べておくのではなく、それらの利用に際しては、そこにいる図書館員によって何らかの人的援助がなされなければならないことを強調したものである。“事務都合ノ許ス限り”という制限はあるにしても、明治 30 年代の初めの、帝国図書館長という立場にあるものの意見として注目し値しよう。

明治 39 (1906) 年 3 月 20 日、帝国図書館新館の開館式において、田中稲城館長は、式辞の中で次のような理想を述べた。

夫レ本館ノ管理ニ付テハ、……管ニ有用ノ図書ヲ選択蒐集スルノミナラス、進ンテ世ニ之ヲ利用セシメ、其効用ヲ完全ニ發揮センコトヲ期スルニアリ、例ハ一事項ヲ研究調査セントスル者アル時ハ、凡テ蔵書中ノ之ニ関スル者ハ、其一書ヲ成スト他書中ニ混入スルトヲ問ハズ、尽ク之ヲ検索シテ余ス所ナク、且、諸者ノ声ニ応シテ、速ニ之ヲ提出シ、以テ其研究調査ニ便シ、些少ノ遺憾ナカラシメンコト、平生ノ理想トスル所ナリ。¹²⁶⁾

田中館長が、レファレンス・ワークについて何らかの知識を有していたかどうかは不明である。しかし、彼のこうした図書館サービスに対する考え方、なかんずく人

的援助の必要性に対する認識は、先に述べた米英での研究と帰国後の館長としての経験とによってもたらされたものといえよう。また、彼のこうした抱負は、その個人的な努力とすぐれた指導力によって、既に実施されつつあったのである。利用者に直接接して、その質問と要求とに応じていたのは、出納係の主任太田為三郎である。

2. 太田為三郎と『日本随筆索引』の編纂

『日本随筆索引』(明治32)の出版に際して、東京帝国大学付属図書館長の和田万吉は、次のような“序”を寄せた。太田為三郎の努力が、人々の知る権利の拡大にいかん資するものであったか、容易に想像されよう。

友人太田君、夙に職を帝国図書館に奉じ、公余尚ほ目録の学を研究して懈らず。曩に本邦随筆索引の編纂を企て、踞勉三閏年、業を供へて之を図書館に献じ、以て登覧者の緇閭に供へたり。其収むる所の随筆百六十四種、掲ぐる所の件名凡そ一万六千条、すべて五十音仮字順に抛りて排列す。覽者索むる所の事物の称呼を以て搜るに、容易く其出处を明らかにすること、恰も囊中の物を探るが如く、洵に読書界の絶好指針たり。其編纂の勞苦に至りては尋常著述の比に非ざりしことを想見すべし。¹²⁷⁾

彼は、物的援助の充実のみならず、目録係として、また出納係主任として、当時の利用者に多大の便宜と助力とを惜まなかった。昭和3(1928)年3月31日の日比谷図書館における彼の講演は、“丁度私がレファレンス・ライブラリアンとなって、前述の様な質問に当って居た時分……”¹²⁸⁾の経験をもとにして、索引作成上の留意事項を詳細に解説したものである。但し、明治30年代の太田が、自らをレファレンス・ライブラリアンであると意識していたかどうかははっきりしない。また、彼の援助は、あくまでも親切心とか職務に対する熱意とかに発するものであって、事務分掌等に明示された義務としての援助ではなかった。¹²⁹⁾

いずれにしても、当時のわが国図書館界にあっては、太田為三郎の尽力が、その積極性と効果という点で、唯一のすぐれた人的援助であったものと思われる。坂本四方太の“学識ある指導者を置いて親切に閲覧者に助言を与へてをる所と云うては、唯一の帝国図書館を差置いては、他に余り類例を発見せぬやうに思ふ”¹³⁰⁾という指摘は、この辺の事情を明らかにしたものといえよう。

III. レファレンス・ワークのあけぼの

明治40年—大正9年

明治の中期から大正にかけて、わが国の近代化は急速に進み、開国以来わずかの期間に、それまでの封建国家も近代資本主義国家としての成長を遂げた。その間、対外的には、日清(明治27)・日露(明治37)の両戦争に勝利を占め、第1次世界大戦(大正3)に参戦した後は、大正8(1919)年のパリ講和会議において5大国のひとつに列するまでに躍進した。ところが、こうした対外戦争は、わが国の近代化を加速度的に推進する条件となっただけでなく、反面では近代化を軍事的方向へと傾けさせる原因にもなったのである。

一方国内的には、大逆事件(明治43)に象徴されるような暗い一面を残して明治は終り、時代は護憲運動の波打つ大正へと入る。第1次世界大戦は、その渦中から離れていたわが国に思わぬ戦争景気をもたらしたが、それも長くは続かず、やがて戦後の不況が訪れるのである。驚異的な速度で進行したわが国の近代化に内包する様々な矛盾は、この時代を通じて次第にあらわとなり、社会問題として人々にも意識されるようになって行った。わが国最初の政党内閣である原敬内閣が成立したのは、大正7(1918)年のことである。

図書館界の動きに目を移すと、明治40年代は巡回文庫の活躍が目立ち始める時期であり、その後大正の中期に至るまでの10余年間は、公立図書館の数が10倍にふえたことから伺えるように、¹³¹⁾明治維新から30年代に至る、それまでの欧米の近代的図書館の移植時代を脱して、全国的な普及に入った時代である。この時代には、全国の主要な図書館、特に県立・市立の図書館が相次いで建設された。このことは、『図書館雑誌』の創刊(明治40・10)による図書館管理技術の普及や、明治42(1909)年の京都における第4回大会を皮切りに、以後全国図書館大会がしばしば地方で開催されるようになったことと無関係ではあるまい。¹³²⁾

しかし、量的な拡大は必ずしも質的な向上を意味しなかった。明治43(1910)年2月、文部大臣小松原英太郎が地方長官に対して発した訓令「図書館設立ニ関スル注意事項」は、こうした動きに警告を与え、図書館設立の基準を示そうとするものであった。また、学校教育以外にも、国民一般に“通俗平易”の方法で教育を行なおうとするいわゆる通俗教育の必要性が叫ばれた。すなわち翌44年には、文部大臣の下に通俗教育調査委員会が設

置され、通俗図書審査規程も設けられたのである。

図書館員養成の必要性が叫ばれ始めたのもこの時代であり、¹³³⁾次の時代を担うにふさわしい図書館人が多数輩出した。前の時代と同様、海外に派遣されたり、個人で留学する者の数は相変わらず多く、そうした人々による欧米での体験記も多数発表された。この時代に図書館事情視察等を目的として欧米を訪れた図書館人には、明治42(1909)年の和田万吉、45年の今井貫一、大正4(1915)年の佐野友三郎等がいる。

この時代に出版された図書館に関する主な著作としては、明治45(1912)年の『図書館管理法 訂正版』を始め、日本図書館協会編『図書館小識』(大正4)、植松安著『教育と図書館』(大正6)、田中敬著『図書館教育』(大正7)、今沢慈海・竹貫直人共著『児童図書館の研究』(大正7)、佐野友三郎著『米国図書館事情』(大正9)、市毛金太郎著『師範学校教程図書館学要綱』(大正9)¹³⁴⁾等がある。

A. “人的援助”の紹介 その後

1. 『図書館雑誌』の創刊

明治34(1901)年に関西文庫協会が創刊した『東壁』は、わが国における図書館雑誌の創始であったが、わずか4号で消滅した。従って、わが国における本格的な図書館雑誌の創刊は、明治40(1907)年10月の『図書館雑誌』第1号発行まで、しばらくの時間を要することになった。明治39(1906)年3月、東京で開かれた第1回全国図書館員大会には51名が参加し、図書館令の改正等のほかに、会報の発行についても協議がなされた。そして、翌年の夏季例会では、丸善の厚志による機関誌の発行が決議され、雑誌発行委員には和田万吉ほか7名が選ばれた。

年3回を目標に始められた『図書館雑誌』の発行は、その後も順調で、わが国近代図書館の建設に大きな役割を果たしたのである。ここでは、初期の『図書館雑誌』が、レファレンス・ワークの発展にどのような役割を演じたかを探ってみる。

当時の『図書館雑誌』の記事には、会員による意見や研究の発表などと並んで、欧米の図書館事情や *Library journal* 等の記事を翻訳紹介したと思われるものが多数見受けられる。こうした記事の中から、人的援助に関するものを拾い出すと、それらは様々な内容を持っていることに気づくであろう。しかし、より良い図書館サービスを目指して、図書館員が利用者に何らかの助力を与えるという点では一貫している。その意味で、これらの記

事は、当時の図書館員に、施設としての図書館以上の何かが必要であることを感じさせたであろう。以下は、そうした記事の例である。

a) 「図書館管理上の一頂針」

“米国ニューベッドフォード発刊のスタンダード雑誌中に見えた一寄書の抄録”¹³⁵⁾であるこの記事は、次のように述べている。

図書館に望むべきことは……館内の図書を熟知せる(館員少くとも二名)ありて、登館者の質疑に応じ、図書選択に助力せしむる事なり。……図書館の利用せらるゝと否とは、全く……館員の助力するとせざるとにあり。¹³⁵⁾

b) 「威爾スカルヅフ図書館の答話部」

“カルヅフの図書館商議会にては……館長ポーリンガー氏の提案に基きて、同地商工業者の為に読書案内等に関する答話部の設置を同館に命じたり。……印刷物を諸会社に配布し、書籍の選択其他につきて不審あらば何時にても中央図書館に電話にて尋ね越すべく、然るときは其質問にして理不尽ならざる限り速かに解答を与ふべき旨を通告せり。又カルヅフ実業家は自己の職業に関する書籍の備付につきて意見を申述せんことを勧誘せり。¹³⁴⁾

c) 「図書館に使用せる婦人」

女子は孰れも図書館に於て相当の職務を執るに相違なしといへど、其職掌は同一にあらず。……閲覧室に在りて登館者の世話をなすものもあるべく、結局管理の行届き居るとか、図書のことに精通し居りて調物の相談相手に適し居るとか、又は取扱が丁寧懇切であるとか、それぞれ好評を得る人もあるべく、……¹³⁶⁾

d) 「学校に於て図書館事務の練習」

“今回紐育市ワシントン・アーヴィング^{ハイスクール}高等学校に於て新に図書館学課を教課の中に編入したり。……図書館学課に於ては、紐育公共図書館の講師及図書館学主任デビス氏の指導の下に修むべきもの下の如し。……就中最も重要なるは一般登館者に対する指導助言法並に分類なりとす。此主要なる二課目の練習は毎週五時間二年間を通じ……登館者の指導助言

法には参考書類並に学校及図書館の書物に就て実地練習せしむ。¹³⁹⁾

e) 「オハイオ州に於ける図書館事務の拡張」

米国オハイオ州立図書館長ガルブレース氏は、州立図書館を成るべく多く利用せしめんが為に、州内の諸図書館に、左の如き揭示をなせりという。……館は人々の希望により、其調査せんとする事項に就きて、図書及雑誌中より、之に関する書目を調整して送付すべく、又場合によりては、其事項を写しとり送付すべし。但し手数料を要せず。……州立図書館は、州民共用の為に設立したる無料図書館なれば、州民は館より出来得る限りの便利を享くるを得べし。¹⁴⁰⁾

f) 「英国図書館瞥見記」

“パブリック、ライブラリース紙に掲載された、一米国図書館員の英国公開図書館参観記”¹⁴¹⁾であり、マンチェスター公共図書館の参考閲覧室が不都合であることや、リバプール図書館の参考閲覧室のことにふれた後、さらに次のように述べている。

ロンドンのセント・マルチン図書館に対し、少しく取調事を依頼せしに、鄭重親切なる回答を得たり。其調べの精確なる事は、ワバッシュ（米国大学）出の者も驚くばかりなりと。¹⁴²⁾

g) 「図書出納係の心得」

1912年12月28日発行のパブリッシャースウキークリーに掲載された書店の販売係の心得については、ホイットモア [Frank Hayden Whitmore?] 氏が修正を加えて、図書館員に対する訓言としたものである。“四. 借覧人所望の図書の他にも、類似せる如きものあらば其書名及実物を紹介することを忘るべからず。”¹⁴³⁾ “五. 巧者なる販売係が商売をなす如く、借覧人に満足を与ふる様に心掛くべし。”¹⁴⁴⁾ “六. 機会だにあらば、館並に余り読者の多からぬ図書を称揚紹介する事を怠るべからず。”¹⁴⁵⁾

h) 「三代相伝の図書館員」

ハーバード大学図書館の貸付部長たるキールナン [Thomas J. Kiernan] 氏が去七月三十一日、六十歳で永眠した。……ハーバードの代々の学生は図書の検索に際し、いつも氏の助力を得た。氏は親切な

友人として、又図書館の慈父として、多くの学生から尊敬されていた。氏は小学校を卒って直に図書館に勤めたのであるが、氏の効績が認められて遂には A.M. の名誉学位を得た。¹⁴⁶⁾

この記事は、多分 *Library journal* の 1914 年 9 月号に掲載された “Thomas J. Kiernan”¹⁴⁷⁾ を翻訳紹介したと思われる。この推察が正しければ、当時の『図書館雑誌』は、わずか 2 カ月程度の遅れで、欧米の図書館関係の雑誌記事を紹介していたことになる。当時の編集委員の努力が偲ばれる事実として注目されよう。

ところで、以上の記事は、すべて「海外彙報欄」とり上げられていたものである。次は、「図書館論纂」として太田為三郎によって翻訳紹介された論文をふたつとり上げる。

i) ケオフ [Keogh, Andrew] 「目録編纂及書目掛に就ての意見」太田為三郎 [訳]

レフェレンスライブラリアン（閲覧人が取調をする時の相談役なり書目案内掛とか書目説明掛とか訳すべきか）の職務は、閲覧人に対して有益有力なる助力を与ふのであるが、仮令彼の腹笥は如何に豊富であっても、其材料の受入、整理及記入に就ては、勢他の掛員の力を藉らざるを得ない。¹⁴⁸⁾

従って、“図書を分類排列する事”が重大な任務である書目掛と、レフェレンスライブラリアンとの和合協力が、図書館にとって極めて大切であるとしている。なお著者のケオフについては、“エール大学図書館書目説明掛”¹⁴⁹⁾と記している。

j) ケリー [Kelley, Florence Josephine] 「小図書館の事務」太田為三郎 [訳]

小図書館が良好な成績をあげるために必要なものとして、館長、助手、商議員会をとり上げ、それぞれについて説明している。特に館長については、その重要性を強調し、公衆に接して力を貸すように努力しなければならないと述べている。

図書館で最繁忙な時は通例土曜日の夕景である。斯る時館長は始終書庫と閲覧室とを往来し、力めて閲覧者の助力をせねばならぬ。若し何を観て善いのか分らず、茫然立って居る人を見たならば、此方より進んで、彼が善からうとて相談相手になる事は極めて必要な事であって、此方が備付の書目に優る

事は万々である。……千差万別の人々に対し、館長はよく注意して、夫々に便宜を与へねばならぬ。¹⁵⁰⁾

以上のような、初期の『図書館雑誌』によってわが国に紹介された欧米の図書館事情やそこでのサービスぶり、その後には与えた影響は、決して少なくなかった。図書館を運営して行く上での館長の重要性や責務にしても、出納係の問題にしても、いずれもこの後の時代において、『図書館雑誌』等を賑わせた問題である。なかんずく、「図書出納係の心得」で示されたホイットモアー[F. H. Whitmore?]の6項目にわたる訓言は、いわゆる“ホイットモア氏の意見”として、大正4(1915)年出版の『図書館小識』¹⁵¹⁾等いくつかの図書や雑誌論文に、ほぼそのままの形で引用されたのである。

また、「目録編纂及書目掛に就ての意見」で示された、レファレンス・ライブラリアンの説明やその訳語も興味深いもののひとつといえるだろう。訳者の太田為三郎は、帝国図書館に勤務し、前章でも述べたように、この係によく似た仕事を行っていた人である。当時のわが国では、この種のサービス様式を担当する唯一の存在であったと思われる太田が、reference librarianの訳語に窮したという事実は、彼のサービスが必ずしもレファレンス・ワークという輸入の概念によるものではないことを物語っているのかもしれない。明治30(1897)年前後から彼が始めた人的援助は、あくまでも個人的なものであり、人として他の人々にも親切を尽すという、いわば人情としての利用者援助を行っていたに過ぎないとみることもできるだろう。その意味では、彼のサービスは自然発生的であったといえよう。

Andrew Keoghが述べているような、目録係とレファレンス・ライブラリアンとの関係が問題になるのは、わが国ではずっと後のことである。¹⁵²⁾この時代には、レファレンス・ワークということばにしても、レファレンス・ライブラリアンということばにしても、図書館員さえそれらを口にするのは稀だったのである。しかし、次つぎに紹介される欧米の図書館事情や、そこで行なわれているこうしたサービス様式の実例は、当時の図書館界の指導者層を刺激して、やがてはわが国においても、人的援助が強調され、試みられるようになるのである。

2. ふたつの見聞録

ここでは、この時代の初めに出版された随筆と、終り近くになって発表された小説とを紹介する。

a) 新渡戸稲造著『帰雁の芦』(明治40)

新渡戸稲造は、明治、大正時代の教育家として知られ、しばしば米国の諸大学で講演し、日米親善にも尽した人である。明治17(1884)年、渡米してジョーンズ・ホプキンス大学に入学した彼は、20年に卒業すると、札幌農学校助教授の辞令を受けてドイツに留学を命ぜられ、ボン、ベルリン、ハレの諸大学に学んで明治24(1891)年帰国した。そして札幌農学校教授に就任し、北海道庁技師を兼ねた。その後31年には再び外遊して、翌年には農学博士となり、34年帰国して台湾総督府技師、36年京科大学法科大学教授、39年法学博士となり、第一高等学校長に就任して大正2(1913)年までその職にあった。

明治40(1907)年に出版された『帰雁の芦』は、“度々又永らく洋行しての土産話”¹⁵³⁾であり、“米州にものし給ひし間の学問ぶり欧州にわたられたりし程の出来事感じごとそこはかとなく記し出でられたる……”¹⁵⁴⁾ものである。

この中で新渡戸は、“……羨ましいのは亜米利加の公開の図書館である”¹⁵⁵⁾と述べ、米国の図書館事情を紹介しているが、また“(五二)読書の趣味—学問も親切に依る”では、その冒頭次のように記している。

書物を読むに就けても親切な指導者があるに如くはないことは言わずもがな。此事についても外遊中大いに感じたことがある。保養のために加州の南部に居た頃、退宿の余り、小さな町立の図書館に屢々行った。此処の番人は婦人が二人で、一人は年の頃卅位、一人は廿二三であった。¹⁵⁶⁾

そして、“労働者の女房らしい穢ない婆さん”の“「どうか料理の本を貸して欲しい」”という要求と、8才と10才位のふたりの少女の“「何やら御祭があるので先生が其日に何か暗誦して来いと御仰いました。何を暗誦したら宜いでせう、先生は何でも宜いって」”という質問とに対して、ふたりの図書館員が親切丁寧に答えている様子を詳述している。¹⁵⁷⁾それは、少しでも利用者の要求に見合った本を貸し出そうと努力する、米国の一図書館の館員の姿を紹介したものである。

ふたりの図書館員は、“「そんなら此処を御覧なさい」”と、何頁のどこと印をして其婆さんに貸渡し……”、またふたりの少女に対しては、“画の付いた小児用の本を出して読んで説明して聞かせ……”たのである。¹⁵⁸⁾

新渡戸は、このような図書館員の態度(サービス様式)について、次のような考察をしている。

是は田舎の小さな図書館であって、マア暇があるから斯の如きことにまで手が回るとは云ひながら、暇があれば外に利用法は数多ある……。暇だから出来ると云ふ丈けでは親切の解釈は尽くせない、親切な心掛があればこそ忙しい身でも暇が出来る。僕は之を見て熱く熱く感心した。¹⁵⁹⁾

また、わが国の図書館については、次のような感想をもらしている。

……表題の文字一つ違って居ても借用證を突返へされる、料理本を望めば著者と表題を判明に記さざる限りは貸出無用。斯ふ云ふ塩梅だから書物に親む所か読書がおっくうになる¹⁶⁰⁾

ここに紹介されているようなサービス様式を、レファレンス・ワークの一部であるとする意見には、異論があるかもしれない。しかし、利用者の要求を満足させ、質問に答えるために、図書館員が努力するという点では、すぐれた人的援助であり、この場合、資料を借りて帰るか、図書館内で利用するかというようなことは問題ではない。利用者にとっては、その要求が満たされ、知りたかったことが判明すれば、それで十分なのである。明治の末期に、米国で見聞した図書館のサービス様式とその有用性とを、こうした本の形でわが国に紹介し、かつわが国図書館の現状を批判した新渡戸の功績は、高く評価されるべきだろう。

もっとも、図書館員を番人と呼ぶなど、新渡戸の図書館に対する認識が高いものであったとは必ずしもいえない。また、こうしたサービス様式を、単に図書館員の暇のあるなしや、親切な心がけのみに関連づける見方には大いに疑問がある。このような見方、ものの考え方は、程度の差はあっても、当時の図書館利用者としての学者や研究者、あるいは図書館関係者の一部を支配していたものと思われる。

b) 有島武郎著『迷路』(大正 7)

明治 29 (1896) 年、19 才で学習院中等科を卒業した有島武郎は、札幌農学校に入学し、前述の新渡戸稲造のもとに身を寄せた。農学校を卒業すると、しばらく学校を離れていたが、やがて 26 才の時米国に遊学し、ハーバード大学に進んだ。経済、歴史を専攻し、M.A. の学位を取得した有島は、明治 40 (1907) 年欧州をまわって帰国し、東北帝国大学の英語の講師となり、ついで大学予科の教授に就任した。明治 43 (1910) 年、33 才の時、維

誌『白樺』が発刊され、彼はその同人となった。彼の文学活動は、この時から始められたのである。大正 4 (1915) 年には、教授の職を辞し、翌年、妻および父を失ったことなどもあって生涯の転機を迎え、大正 6 (1917) 年からは、その文学活動は俄然活発となった。『カインの末裔』は彼の文壇における地位を決定し、10 月からは著作集の出版も始まった。

後に、日比谷図書館の小谷誠一のレファレンス・ワーク¹⁶¹⁾や、田村盛一の出納所の研究¹⁶²⁾に少なからぬ影響を及ぼした『迷路』は、初め『中央公論』の大正 6 年 10 月号に掲載され、翌年『暁闇』とともに、著作集の第 5 輯に収められた。この小説には、かつて留学したハーバード大学が登場し、当時のハーバード大学図書館のサービスぶりを偲ばせる場面も含まれている。

「ウェブでも読んでやるかな。」

かう独語しながら、A は L 教授の講堂から校庭に出て来た。……

彼れは古めかしい大きな建築の暗い階段を登って閲覧室に這入って行った。……彼れは真直に目録棚の所にいってカードを繰り始めた。ウェブに来るまでに色々な書物の名や著者の名が彼れの注意を牽いたので、彼れは興に入ってかの引出し、この引出しと漁って歩いた。その時女の靴音が彼れに近づいた。が、彼れは格別の注意を払はうとしなかった。「お手伝致しませうか。」

彼れは夢みるやうな眼をあげてちっとそこに立つ人を見た。それは一人の女事務員に過ぎなかった。

「あ、ウェブを。」

「ウェブの何んで御座います。」

「ウェブの『生産業上の民主主義』でも読みませう。」

かう彼れは答へた。而して、

「然しファビアン協会ぢやいやになるな。」

と日本語で独語ちた。……

「御免下さい。今のお言葉はよく判りませんでしたか……。」

その声を聞くと彼れは夢から覚めたやうに、始めて自分の側に立ってゐる婦人を意識的に見た。彼れはすぐその婦人に好意を持った。……

「お許し下さい。私決して貴方を辱める積りで伺ひ返したのではなかったのですから。もしか私の伺つておく事を聞き漏したかと思ひまして。」

彼女はすぐ顔を挙げて、彼れを静に見やりながら、潤みのある優しい声でかう詫びた。……

暫くして彼女は彼れの机の所に書物を持って来てくれた。

「つまるかつまらないか、もう一度学徒の生活だ。」
彼れは一人になると又さう独語ちた。¹⁶³⁾

有島の場合にも、女子の図書館員を女事務員と見るなど、図書館に対する認識に問題がないわけではない。しかし、少なくとも、彼がハーバード大学図書館に対して描くイメージは、悪いものではなかったといえよう。従って、この小説は、前記ふたりの図書館人以外にも多くの人々に影響を与え、図書館および図書館サービスの発展に、何らかの貢献をしたものと思われる。すなわち、図書館の関係者には、この種のサービス様式の必要性和重要性とを自覚させ、一般の利用者には、図書館員による援助というものの存在を知らしめ、図書館および図書館サービスに対する印象を深めさせたであろう。

3. 図書館人による紹介

東京帝国大学付属図書館長和田万吉は、明治42(1909)年7月、9カ月にわたる図書館事業視察のため欧米訪問の途についた。ここでは、帰国後の和田のふたつの報告をとり上げる。

「欧米図書館の現況一斑」と題する報告が『図書館雑誌』に発表されたのは、明治43(1910)年7月のことである。田中は、この中で、図書館員の親切な行為について、次のように感想を述べている。

一般登覧者は勿論、一時の遊歴者にして館内巡覧を請ふ者などを待つにも、常に温顔を以てし、往々突飛の質問殆ど難題然たる問をなす者に対しても之を嘲笑する等の辞容無く、懇切丁寧に解答してやる。此は米国も欧州諸国も殆ど一斉と謂はれるが、中にも米国がやはり際立って見える。……事務に勤勉励精であるのは単り図書館に限ったことでは無く、寧ろ西洋一般の美風であらうが、人に対して深切を極めるの一点は特に図書館に就て見られるやうに思ふ。¹⁶⁴⁾

わが国図書館の実情に通じている和田にとって、欧米の図書館員の、利用者に親切な様が印象に残ったことは、当然過ぎるくらい当然であったといえよう。しかし、それも単なる印象の吐露に終り、人的援助の必要性を強調

するまでには、この報告では至らなかった。

続いて、明治45(1912)年5月、帝国図書館における第7回全国図書館大会席上で、米国の図書館を中心に、西洋の図書館の最近の建築傾向について講演した。“閲覧室の周壁に沿って参考書類を並べる事をせぬ図書館もあるが其処には別に参考室といふを置いて、其中に公衆の自由に検索し得る仕掛をする。是でも不都合は無いのである。¹⁶⁵⁾と述べた和田のことは、当時のわが国図書館が、物的援助すら満足に提供できない状態にあったことを示しているといえよう。和田自身、まだレファレンス・ルームの何物たるかも、その必要性についても知らなかったのであろう。

山口県立山口図書館長佐野友三郎が、官命を帯びて米図書館事情視察のために渡米したのは、大正4(1915)年5月のことである。佐野は、明治36(1903)年に館長就任以来、巡回文庫の開始(明治37)、書架の公開(明治40)、十進分類法の採用(明治42)等、わが国地方図書館の近代化に尽した実務家として知られている。彼はまた、当時の図書館界における偉大な啓蒙家でもあった。

彼の渡米に先立って発行された『山口県立山口図書館報告』第20は、「通俗図書館の経営」特集号であった。この中の“第四章 図書の整頓及目録編纂”で、彼は次のように述べている。“小図書館に於ける目録及分類は前項示す所の簡易なる例に従ひ館員自ら懇切に説明指導の勞を執り活ける目録を以て自ら任ずべきなり。”¹⁶⁶⁾また、“第五章 図書の出納”では、出納所と利用者との関係について次のように述べている。

出納所は図書館の実務部にして単に書籍の出納のみならず、図書に対する質問応答も小図書館に在りては凡て爰に於て行はるゝが故に善かれ、悪かれ、図書館に対する印象の構成せらるゝは公衆の爰に受けたる待遇の如何に依るものと知るべし。故に此の方面の交渉は極めて鄭重懇切を旨とし忍耐と熱誠と公平とを以て事に従ひ、図書を以て人に仕へ、人に役はるゝを本旨とすべし。読衆の求むる所のものは速に之を与ふるか、否らざれば、其の与へ難き所以を告げて満足を与へざるべからず。¹⁶⁷⁾

佐野が、このように図書館の出納所の重要性を強調したのは、彼自身の体験からというよりも、実は影響を受けた著作があったからである。彼は、明治44(1911)年にケムフィールド等著『師範学校教程図書館管理要項』

を抄訳し、自費で出版したことがある¹⁶⁸⁾。その後、これは『図書館雑誌』の付録にもなり、広く流布した。¹⁶⁹⁾ の中には、“出納台”¹⁷⁰⁾として、ほぼ同様のことが書かれているのである。

さて、米国図書館事情の視察をおえて帰国した彼は、大正 6 (1917) 年、その報告文を執筆した。この報告は、啓蒙家としての彼の最後の仕事になった。これは、『米国図書館事情』と銘うって、大正 9 (1920) 年 5 月文部省から出版されたが、同じ月の 13 日、彼は 56 才で急逝したのである。

『米国図書館事情』の“第三編 図書館利用法 第三章 図書の出納”には、興味深い記述が見られる。それは、“図書館の参考的任務”についてふれた部分である。

図書館の参考的任務は書籍を求め事実を求むるに在り。書籍を求むるは読む為に書籍を選択することと事実を求むる為に書籍を選択することを含む。参考上、図書館の最も重大に、最も普通なる第一の任務は読むべき書籍を求むるに在り。此目的に対する助力は貸出部に属せずして閲覧部に属す。図書館の参考上、第二の任務は事実を求むるための書籍を知るに在り。目録の必要なる所以爰に存す。図書館の参考上、第三の任務は事実其の物を求むるに在り。

閲覧係の此任務は要するに左の五項に帰着す。

- 一 監視
- 二 助言、案内
- 三 書目の準備
- 四 書籍に関する問合の回答
- 五 図書館及目録の使用法

理論上、図書館の指導は一面に於て参考書目を、一面に於て事実其の物を求め得べき書籍を指示するを以て足れりと云ふべしと雖も、事実には於て読書法及参考書使用法をも併せて授くるを可とすべし。¹⁷¹⁾

この“参考的任務”ということばが、何かの訳語に相当するものかどうかということについては、不明である。“第二編 米国図書館の経営 第五章 図書館員の養成”¹⁷²⁾では、米国の図書館学校における授業内容を紹介し、各科目名を列記しているが、その中に legislative reference work の訳語と思われる“立法参考作業”が含まれている。従って、“参考的任務”ということばを、reference work の訳語とみなすのは、この場合困難であろう。

ことばの詮索はさておき、文章の内容から判断すると、“第一の任務”は読書案内ともいうべきものであり、“第二、第三の任務”はレファレンス・ワークに相当するものといえよう。どちらも、すぐれて、個々の利用者に対して図書館員から与えられる人的援助であることには相違ない。

しかし、佐野がこの種のサービス様式に関して特別な知識を持ち、こうした人的援助に深い理解を示していたとも思われない。なぜなら当時の山口県立山口図書館に関する資料の中にも、佐野の著述の中にも、人的援助を強調し、その実践に努めたという記述を見出すことはできなかったからである。しかし、彼が当時の図書館界におけるすぐれた実務家であり、偉大な啓蒙家でもあったことを思う時、穿った見方をするならば、彼は、先進国米国で広めた豊かな見聞とその並みはずれた洞察力とによって、当時の山口県立山口図書館をもってしてもなお、この種のサービス様式の公的な採用は、時期尚早であると悟っていたのかもしれない。

大正から昭和にかけて盛んに活躍し、毛利宮彦との共著『内外参考図書の知識』(昭和 5) 等で、第 2 次世界大戦後の図書館界にも少なからず影響するところのあった田中敬は、この時代、東北帝国大学付属図書館に勤務し、青葉女学院の講師を兼ねていた。大正 7 (1918) 年 5 月、彼は『図書館教育』と題する一書をものして同文館から出版したが、それは、学校図書館・大学図書館・公共図書館等の持つ、いわゆる教育的機能についてまとめたものであった。

『図書館教育』の中には、わずかではあるが、利用者が資料を探し出す際の手がかりとなるものについて述べた箇所があるので、次に引用してみる。これは、職業選択に果す図書館の役割を論じた部分で、“図書館の任務並に効果”と題する章の中の、“図書館の教育力”を扱った節に含まれている。

検索の案内としては各種各様の目録や、索引があり、更に他の諸館の目録や……合成目録があり……分類索引があり解題書があるが、尚それで間に合はない時には館内各所に配置してある参考係に尋ねると親切に指導される。各種の質疑に対する解答は次第に聚積して是が整理されると諸般の項目に関する検索目録が自然に成り、次の質問に対する解答の手引となって迅速且精確に応答される。¹⁷³⁾

田中がここで述べているレファレンス・ライブラリアン（参考係）は、目録等の物的援助を補う役目を果すものであり、彼は A. E. Bostwick や J. D. Brown 等の英米人の著作を参考にして『図書館教育』を執筆したが、当時の多くの図書館員が起こしたような誤解はしなかったのである。また、彼がレファレンス・クwestions の蓄積によるインフォメーション・ファイル（検索目録）の作成にもふれている点は、注目しなければならない。

彼は、レファレンス・ライブラリアンを“館内各所に配置し”と述べているが、これは、後に言及する早稲田大学総長平沼淑郎の意見とよく似ており、便利なものはより多くしたいという、当時の関係者の積極的な姿勢を示したものといえよう。では、当時の東北帝国大学付属図書館に、“親切に指導”をしてくれる係が存在したのかというと、必ずしも肯定はできないのである。こうした判断は、当時の図書館の実態を明らかにする資料を揃えないことにはできない。恐らく、当時の東北帝国大学における図書館サービスの実情は、田中の理想とは縁遠いものだったのではないだろうか。

用語に関して述べると、彼は、別の頁では、レファレンス・ライブラリアンを“^{レファレンス ライブラリアン}参考司書”¹⁷⁴⁾と書いている。また、レファレンス・ワークについては、イリノイ大学図書館学校の学科内容を紹介した中で、“参考事業”と訳している。¹⁷⁵⁾

B. “人的援助”の強調とレファレンス・ワークの紹介 1. “人的援助”の強調

大正元（1912）年、今沢慈海は、児童用図書の指導監督の任にある係員について、次のように述べた。“東京市立図書館関係員によりて組織せられて居る「十四日会」の席上で述べた所のものの一部”¹⁷⁶⁾である。

“……係員が直接児童に接して適当なる忠言暗示をなすと云ふことが最も有効である。所詮、図書館の管理は百の設備そのものよりも、一の親切丁寧なる係員の方が有効なのである。両者が揃えば所謂鬼に金棒である。”¹⁷⁷⁾

ちなみに、東京市立日比谷図書館が児童の館外貸出を開始したのは、大正 2（1913）年 8 月であり、人的援助が物的援助に優先することを強調した今沢は、翌 3 年、日比谷図書館長を命ぜられ、大正 4（1915）年 4 月には、東京市立図書館処務規程の改正によって、東京市立日比谷図書館館頭に就任した。

大正 2（1913）年、日本図書館協会は、創立 20 周年記念式典を挙行するとともに、侯爵徳川頼倫を総裁に迎えて発展の基礎固めとした。徳川総裁は、私立南葵文庫の経営等で、早くから図書館界にもその名を知られていた人である。この年の 10 月、大阪市立高等商業学校における第 8 回全国図書館大会席上で、徳川総裁は次のような演説を行なった。

平常無用の館員と思はれて居るものが、其の实なかなか必要なのでございます。それは何かと申すと、或る書籍を調べる、即ち社会に於ての出来事に就いて斯う云ふことがあるが、是れはどう云ふ事であるか、斯う云ふ事に就ては是まで何か著述とか或は論説の如きものはあるまいかと尋ねられた時に、それは何々博士の論文があると云ふやうなことを御答へする。さう云ふ方法としては是が誠に必要なのである……¹⁷⁸⁾

京都帝国大学総長沢柳政太郎は、「図書館の教育的任務に就て」と題する講演の中で、図書館員と利用者との密接な関係が必要であると次のように強調した。

もう少し閲覧者と図書館員と云ふ者とが、密接・直接の関係がなければならないではないか、是は随分むづかしい事でありまして、往々人の言ふことでありますが、閲覧者が来て斯う云う事を調べやうと思ふが、それは何を見たら宜からうと云ふ相談相手になることが必要であると云ふ事も既に申されて居るやうであります。是は随分むづかしいことである。何故なれば唯一方面の事を知って居ただけでは偶其の事を尋ねる者があつたならば、それに対して答をすることは出来ませうけれども、閲覧者は種々の目的を以て千差万別の事柄を調べんとする所のものでありますから、それに一々相談相手になると云ふことは、余程困難なことである。併しながらそれも一つの方法であらうと思ひます…¹⁷⁹⁾

沢柳は、図書館員による人的援助の必要性を強調することはできたが、この種のサービス様式が、図書館員の単なる記憶や知識によるものではなく、組織的な訓練と豊富な経験とに基づくものであることを知らなかったであろう。当時の、あるいはその後の図書館員の中にも、この種のサービス様式を効果的に行なうためには、いわゆる主題専門家が必要であるという意見を持つ者が少な

くなかった。実践的な裏づけに乏しい当時のこうしたサービス様式を、なおさら貧弱なものにし、また長続きさせなかった原因のひとつには、図書館員の引込み思案や自信のなさもあったのである。

沢柳総長のこの講演が、京都帝国大学図書館のサービスに、どのような影響を与えたかは明らかでない。しかし、明治41(1908)年の『京都帝国大学図書館案内』によれば、既に“明治三十七年七月閲覧室ノ一隅ニ法科大学参考図書ヲ排列シ閲覧者ノ便ヲ図リ……次デ同年九月ヲ以テ始メテ庫内ノ検索ヲ許可……”¹⁸⁰⁾するなど、当時としては恵まれた状態にあったといえよう。従って、次の段階として、何らかの人的援助が学生等になされていたとも考えられる。

日本図書館協会は、和田万吉、今沢慈海、村島靖雄、植松安に執筆を依頼して、大正4(1915)年、『図書館小識』を編纂した。出版にかかわるすべての経費は、徳川総裁から提供され、全国の多くの市町村に頒布された。

“第五章 図書館の職員及其職務”では、“出納係(又閲覧係)”の職務を次のように述べている。

出納係は図書の出納に関する事項、図書の館外帯出に関する事項、閲覧室の設備整頓、閲覧の案内に関する事項、閲覧図書及閲覧人の統計に関する事項、出納手の監督に関する事項等を主たる任務とす。……此係員の職務の一として、尚重要なるものは閲覧者の案内なり。図書館に於て書庫を開放せざる限り、如何に完全なる目録を備付くとも、図書の内容を充分に閲覧者に示すことは難し。又或閲覧人が或一事項を調査研究せんとして、如何なる参考書を閲読すべきかを知り得ざること甚だ多かるべし。かゝる場合に其館の蔵書に精通せる係員が親切なる相談役となり、適当なる図書の指摘を為すことは、公衆にとりて何よりの利便なるべし。故に欧米の大図書館に於ては専務の指導係を置き、小図書館に於ては館長自ら其任に当ること少なからず。¹⁸¹⁾

『図書館小識』が全国的な規模で普及したことは、わが国におけるその後の図書館経営にも様々な影響を及ぼすこととなった。多くの図書館では、事務分掌等の決定に際して、この本を参考にするようになり、この本を手本にしてサービスが行なわれるようになった。出納係の仕事として、“閲覧人の案内”が掲げられ、それぞれの図書館がそれぞれの方法で実践を試み出したのである。当時、

それぞれの図書館が目指すサービスの内容は、この本に書かれた文章通りであるという点では一致していたが、いずれの図書館においても具体性に欠ける嫌いがあった。日常の業務を続けながら、一方でこの種のサービス様式に対する研究を怠らず、経験を積み重ねて、サービスの充実を期すなどということは、おいそれと誰にでもできることではない。この種のサービス様式の重要性は十分承知できても、それを軌道に乗せ、さらには利用者の支持にまで結びつけることのできる図書館員は、例外的な存在でしかなかったのであろう。所詮兼務の仕事は、兼務なりの内容しか持てないのである。この点に関して、最後に欧米における例が引かれ、大図書館での指導係の独立と小図書館での館長の任務の重要性とが指摘されていることは、注目に値しよう。

しかし、こうした欧米におけるこの種の係の独立設置や館長の任務の重要性について、初めてわが国に紹介したのは『図書館小識』ではない。図書館を教育機関としてとらえ、そこにおける指導係の重要性を強調した論文は、明治43(1910)年、東京帝国大学図書館司書官坂本四方太によって書かれた。坂本は、次のように述べている。

図書館をして完全なる教育機関たらしめようと思ふならば、現在の制度では到底満足が出来ぬ。どうしても閲覧者を教導する役員を別に置かなければならぬ。此役員になる人は、小図書館にあっては館長自身、大図書館にあっては専任の教導係或は案内係が閲覧室に出張してゐて、閲覧者指導の任に当らねばならぬ。欧米の各公開図書館では、夫々此用意が出来て居て、閲覧者に対する待遇振も親切を極めてをるのである。¹⁸²⁾

さらに、この後では、指導係の資格や、その任務にあたるべき人について言及している。

坂本がこの論文を草す際の手がかりとし、“欧米の各公開図書館では……”と述べたよりどころになったものは、当時、既に第2版を数えていた Alice B. Kroeger の *Guide to the study and use of reference books* であろうと思われる。¹⁸³⁾

この時代に行なわれた人的援助の強調は、一般的に言うところ、図書館員が利用者の相談相手になることの必要性を説いたものであり、そのためにも、図書館員は利用者にとって親切・丁寧であれと述べている。指導係という名称

も、実は、この相談相手になる図書館員に与えられたものである。ところが、図書館の教育的機能を重視しようとする人々の登場は、単なる相談相手としての指導係や案内係に、文字通りの指導的任務を負わせる結果となった。そして、社会情勢の変化に伴って、指導的役割が次第に重くみられるようになり、相談相手としての機能は、相対的にその地位を下げて行ったのである。

しかし、一方ではまた、人的援助の実践が序々に組織立てられ、ある程度の支持者も獲得して、本格的なレファレンス・ワークを実施する図書館も現われてきた。わが国におけるレファレンス・ワークの発展は、その出発点において、既に様々な方向性を有していたのである。これは、近代的図書館サービスの歴史が始まって間もないわが国にあって、当時の図書館界の指導者たちが、図書館サービスに対して、具体的な抱負や確固たる信念を有していなかったことも原因のひとつといえよう。それだけに、社会情勢の変化にも順応しやすかったのである。

2. レファレンス・ワークの紹介

早稲田大学図書館員毛利宮彦は、大正4(1915)年5月、校命によって、図書館ならびに大学研究室制度研究のため米国に渡り、ニューヨーク公共図書館付属図書館学校に学んだ。約1年間の留学をおえて、翌年7月に帰国した彼は、10月には山形市で開かれた第11回全国図書館大会で講演し、米国での見聞を披露した。毛利はこれの中で、“近来アメリカでは学校図書館たと公衆図書館たとを問はず、レファレンス・ワークと云ふことが最も重要な図書館機能の一になって来たのである。”¹⁸⁴⁾と述べて、レファレンス・ワークの簡単な紹介を試みている。第I章の定義のところで引用したものがそれである。

さらに、彼は、レファレンス・ライブラリアンについてもふれたが、この係が具体的にどのような準備をし、どのような方法でサービスを進めて行けばよいのかについては、次のように述べたに過ぎない。この点では、従来行なわれていた人的援助の紹介・強調と大差はなかった。

レファレンス、ライブラリアンたるものは任意の買客に対し商品を提供する店員と思ふがいい。若しも此が些か自尊心を傷くるものとせば、読者に温い助言を与ふる平民的学校教師を以て任ずべしである。¹⁸⁵⁾

その後、毛利は、早稲田大学図書館を辞して大阪毎日新

聞社に入社し、図書資料を中心とする調査部の創設に努めた。しかし、彼が早稲田大学の関係者に残したレファレンス・ワークの波紋は、決して小さくはなかったものと思われる。早稲田大学総長平沼淑郎は、大正8(1919)年4月、東京高等商業学校における第14回全国図書館大会席上で、次のような講演を行なったのである。

すべて図書館には必ずレファレンス・ライブラリアンを要する、閲覧者が取調の要目を予め定めて、さうして、レファレンス・ライブラリアンに訊ねると、それは何々の書物を見ればよろしいと云ふことを示してくれる、かやうな館員は数名、イヤ十数名は備へるやうにしたい、しかしかう云ふ人を備へると云ふには多額の給料を与へなければならぬ、これまた待遇問題に帰着するのであります。¹⁸⁶⁾

しかし、当時の早稲田大学図書館が、どの程度までレファレンス・ワークを実施し、果してこのために必要な係員を配置していたかどうかは、いずれも不明である。

C. 各館の状況

1. 帝国図書館

『帝国図書館報』の創刊号(明治41.5)には、入館してから図書を“借受”けるまでの諸手続を説明した個所があり、続いて次のような記述がみられる。“但始テ来館スル者ハ掛員ニ其詳細ヲ問合スベシ目錄ハ数種類アリ室内ニ其案内ヲ揭示シアレドモ不慣ノモノハ掛員ニ教示ヲ乞フベシ。”¹⁸⁷⁾

太田為三郎の個人的努力で始められた、帝国図書館の人的援助は、この時代に入っても、ひとつの組織として行なわれるまでには至らなかった。しかし、図書館の利用や資料の利用に対する指導・案内が必要なことは広く認められ、それが先に引用したような表現となって現われたものと思われる。

この時代の太田は、自らをレファレンス・ライブラリアンであると意識して、サービスに努めていたようである。明治45(1912)年5月、帝国図書館で開かれた第7回全国図書館大会席上における太田の講演は、当時の彼の考え方を示したものとして興味深い。「図書館は一つの営業なり」と題するものであるが、図書館と商店とを比較して、その経営法を次のように紹介している。

(何か調べ事をしようといふ場合に) 図書館の事に通曉して居る掛員が居て、親切に相談相手になり指

導して呉れる時は、忽ちの内に用事が弁じ、公衆の便利はいふ迄もなく、館員にとっても無益に図書の出納をしないで済むので、大に手数を省略する事が出来る。米国では少し大きい図書館には図書指導掛なる者を置いて、主として此仕事をさせて居り、小さい図書館では館長が自ら此任に当って居る。……書庫開放が出来れば此上ないが、若し時尚早しといふ事であれば、せめては斯る趣向にしたらば、自他の便利は一方ならぬ事であらう。¹⁸⁸⁾

2. 東京市立日比谷図書館

守屋恒三郎は、明治44(1911)年11月、日比谷図書館主事に就任した。彼は、わが国の代表的公立図書館を比較紹介した中で、当時の日比谷図書館について次のように書いている。

日比谷図書館には巡視といふものが三人ある。現今では、其中二人は、閲覧票交付係(玄関受付)で、他の一人は館内の清潔風紀を取締り、又閲覧人の為に、各種の案内をなすべきこととなって居る。¹⁸⁹⁾

また、こうした巡視というものの今後の扱いについては、次のように考えていた。

‘時勢の推移と共に、監視の如き消極的設備を一転して、閲覧人の為に、案内指導するといふが如き積極的設備を、今後益助長する必要があるのである。併し之は決して、簡単なる仕事ではない。¹⁹⁰⁾

大正4(1915)年、東京市には、日比谷図書館を中央図書館とする新しい図書館体制が確立し、東京市立日比谷図書館館頭には今沢慈海が就任した。既に述べたところである。今沢は、わが国における最も偉大な、図書館界の啓蒙家のひとりであったし、新しい図書館サービス様式の導入にも積極的に努めた人である。彼が館頭に就任して、先ず手がけたサービス様式の中に、“同盟貸付”と“図書問合用箋”とがある。前者は、東京市立図書館の中での相互貸借制度であり、後者は、“閲覧者ヲシテ予メ或研究事項ニ関スル参考書ノ有無及帶出ノ能不能ヲ問合サシメ、之ニ対シ図書館ヨリノ確報ヲ待チテ登録セシムルノ便法”¹⁹¹⁾である。遠来の利用者に、できる限り無駄足を踏ませないようにという配慮から設けられたものである。『図書館雑誌』には、この用箋の詳しい紹介が

なされているが、それによると“統々利用者あり、将来同市立各館にも施行せん計画……”¹⁹²⁾だったようである。

今沢は、大正9(1920)年5月、京城で行なわれた第15回全国図書館大会において講演し、“公共図書館が、人生の生涯的教育なる大使命を達成する上に必要なる手段”として12項目をあげ、それぞれについて説明を加えた。そのうちの第7は、“図書の案内、参考調査の指導を為すこと”である。この論拠として、彼は次の2点をあげている。

(一) 図書館教育が単に図書を通じての教育なりとの常見を破し、図書館に於ても事情の許す限り、個人的に公衆に接触して其研究調査を指導せざるべからずこと。

(二) 出来得るだけ図書利用の労力と時間とを経済的に使用せしめんとする努力。これなり。¹⁹³⁾

こうして、東京市立日比谷図書館では、理論面でも実践面でも、本格的なレファレンス・ワークを実施できる素地が整えられて行った。

3. 京都府立図書館

明治36(1903)年、館長に就任した湯浅吉郎は、欧米での豊かな見聞と経験とを基礎にして京都府立図書館の経営にあたり、図書館界でも活発に発言した。大正7(1918)年に早稲田大学図書館顧問となるまでの湯浅が、京都府立図書館において心を注いだいくつかの仕事のうち、わが国におけるレファレンス・ワーク発展史上忘れることのできないものは、大正5(1916)年から6年に至る頃作られた“質問応答規定”である。以下、『図書館雑誌』の紹介記事を引用する。

一 閲覧者にして或事項に就き調査するも適當なる参考書を選出する能はざる場合には出納口にて質問用紙を請求し之に要領を記入の上差出されたし

一 前記の質問ありたる場合には成るべく即刻応答すべきも事項の内容如何により多少の時日を要することあるを諒せられたし¹⁹⁴⁾

さらに、『図書館雑誌』は、この“規程の下に質問応答の機関を設け、閲覧者の研究せんとする事項に対し急速に参考書又は方針を指示すべき計画をなしたり。¹⁹⁵⁾と述べている。しかし、規定の内容からみて、質問に応

ずる係は兼任だったようである。

京都府立図書館の質問応答規程定、この種のサービス様式に付随した規定として、わが国では最も古いと思われるところに意義がある。こうした規定が設けられ、質問用紙が作成された背景には、図書館側の思いつきというよりも、利用者が増大し、図書館や資料の利用に関する種々の質問が出納係のところに殺到して、業務に支障を来す等の実際的な要請があったのではないだろうか。利用者の要求にも適っていたと思われるこのサービス様式は、以後継続して行なわれたのである。¹⁹⁶⁾

4. その他の図書館

神戸市立図書館司書伊達友俊は、開館後間もない同館の経営方針を次のように述べた。

……司書自身は生きたるデスクリチーフカタログを以て任じ、不案内なる閲覧人を導くと共に一般学術に対する参考を示し、研究の顧問となり、一般普通の閲覧人に対し調査のヒントを与ふる等一切の事項に関し閲覧人の温和懇篤なる相談役たるを希ひ、多くの場合館員自ら閲覧の為調査の労を取りつつあり。¹⁹⁷⁾

このような方針に基いて始められた神戸市立図書館の人的援助はその後順調で、やがては本格的なレファレンス・ワークの実施にまでこぎつけるのである。

当時のサービスの実情について、伊達は、外国人のために図書館員が案内して閲覧手続を省いてやることや、迅速な質問の処理で利用者に満足を与えていることなどを紹介し、さらに、“館員は日々千差万別なる質疑を受けつつある……”¹⁹⁸⁾と述べている。

岡山県立戦捷記念図書館（岡山県立図書館）では、大正8（1918）年4月から一般閲覧室、児童室に指導員をおき、利用者の相談や質問に応じることになったといわれる。¹⁹⁹⁾しかし、実際にどの程度の効果をあげ得たものかは明らかでない。岡山県立図書館が、レファレンス・ワークに取り組んだのは、もう少し後になってからのことと考えてよさそうである。

お わ り に

本稿では、明治初年から大正9（1920）年にかけて、わが国に盛んに紹介され、その必要性が強調されるとともに、一部の図書館では実践も試みられるようになった

レファレンス・ワークを、その本質的特徴である人的援助に焦点をあてながら論じて来た。この時代におけるレファレンス・ワークの発展を簡単に要約すると次のようになる。

明治時代の初めに、先ずわが国に人的援助をもたらした人々は、目賀田種太郎・湯浅吉郎・正木直彦の欧米留学生や欧米からの帰朝者であった。彼らは、欧米滞在中の見聞を語った中で、主に米国の大学図書館における人的援助を紹介した。しかし、多くの場合、彼らの紹介が具体的にどんな役割を果たしたものであったかは不明である。ただ、湯浅の使用した“活ける目録”ということばは、その後も人的援助の必要性を強調する多くの図書館員によって、しばしば使われるようになった。

書籍館の開館以来、様々な経過をたどって発足した帝国図書館は、欧米の図書館事情を視察して帰国した田中稲城の館長就任によって、次第に充実したサービスを行なえるようになった。中でも、『日本随筆索引』の編纂で知られる太田為三郎の活躍は、注目すべきものであった。明治時代の末期にあって、レファレンス・ワークの提供を行ない得た唯一の図書館だったのである。しかし、それとても、兼任の係によって実施されていたに過ぎない。

明治40（1907）年10月、『図書館雑誌』の第1号が発刊され、以後、人的援助を紹介し、その必要性を強調する意見は、大部分がこの雑誌に掲載されるようになった。*Library journal* 等の記事は、『図書館雑誌』を通じて、いちちはやくその要旨が伝えられるようになったし、日本人として初めてレファレンス・ワークにふれた毛利宮彦の講演も、第29号（大正6・2）に掲載された。

明治の終わりと大正の中頃に出版されたふたつの随筆と小説とは、わが国の図書館界に大きな影響を与えるものであった。前者は新渡戸稲造著『帰雁の芦』であり、後者は有島武郎著『迷路』である。いずれも、米国滞在中の図書館利用の経験が述べられている。

英米を訪れた図書館員の多くは、帰国後、見聞した図書館事情についてしばしば講演し、有用な論文も多数発表した。こうした人々によって、人的援助の紹介やその必要性の強調がなされるとともに、レファレンス・ワークの概念も紹介され始めたのである。時代は既に大正へと移っていた。そして、いくつかの図書館では、レファレンス・ワークのための注目すべき試みが実施され出したのである。

帝国図書館では、相変わらず太田が奮闘していたし、

日比谷図書館では、今沢慈海が館頭に就任し、“図書間合用箋”によるサービスを開始した。また、西の京都府立図書館には、わが国最初の“質問応答規定”が設けられた。当時の館長が湯浅吉郎であったことは、十分注目されなければならないだろう。さらに、神戸市立図書館や岡山県立図書館においても、レファレンス・ワークの実施を思わせる準備が、着々となされていたのである。以上が、第2次世界大戦前のレファレンス・ワークの、紹介期および強調期における発展の概要である。

さて大正時代も半ばを過ぎると、文明開化はそのことばとともに既に過去の時代のものとなっていたが、当時のわが国の知識人にとって、西洋文明に触れることは依然必須とみられていた。そして、西洋文明に接する最も手取り早い方法は、いわゆる洋書を読むことであった。多くの人々にとって、海外へ赴き、彼の地における人々の営みやその他諸々の新事実について実地に見聞することは夢であったが、実際にはそうした機会の与えられることは極くまれであった。このような人々にとっては、いわゆる洋行帰りのハイカラさんから、ともすれば誇張されがちな土産話を聞くことが、せめてもの慰めであり、読書だけでは不足がちな自らの知識を補うものでもあった。

こうした状態は、図書館界にとっても全く同様であり、遅々として近代化の進まない、あるいは時流から取り残されかねない図書館界にとっては、ある意味でより深刻であった。従って、今沢慈海・佐野友三郎等、当時の図書館界における啓蒙家たちの活躍する余地は、十分残されていたのである。

しかし、書物からのみあるものを学ぼうとすることは、そうたやすいことではなかった。もちろん、江戸時代の末期に、日米修好通商条約の批准書交換のための使節団の一行として、初めて渡米した福沢諭吉のように、渡米中に受けた様々な事物に対する説明・紹介の多くが、既に書物を通して承知済みであったというような例は少なくないし、勉強熱心な日本国民をもってすれば、そうした事実も驚くには足らないことだったかもしれない。けれども、用語などというものの横行する学問の世界では、適当な用語辞典もないままに独習を進めることはやはり危険であり、時として思わぬ考え違いを起こすことも十分考えられる。それは、当時としては、避けがたいことではあったが。

かつて、帝国図書館の太田為三郎が、レファレンス・ライブラリアン配置の意義を、不用資料の出納を減らす

ことにつながるものであるという一種の経済性に求めたのは、こうした誤解の一例といえよう。この場合、さらに事を面倒なものにしているのは、誤解は誤解なりに筋を通してという点である。つまり、その前後でたいした矛盾も生じていないのである。蔵書の内容に暗い利用者に、図書館の利用方法について説明し、利用者の欲していると思われる個々の資料についてその内容を伝えれば、当時のように出納台を通してのみ資料の利用が可能な図書館では、必要のない資料を出納するというような“手間”は、確かに減少するであろう。こうした誤解は、太田だけではなく、今沢慈海や佐野友三郎など当時の多くの関係者の著述や発言に見出されるものである。

ところで、こうした思い違いは、何も書物を通しての研究だけに限られたことではなかった。欧米諸国を歴訪し、実際にその目で図書館サービスを見学した人々によっても、いろいろな誤解が生まれたのである。ある意味では、後者の誤解の方が、より正しづらいものだったのである。

読書によるにしても、実地見学するにしても、あるいは両者を兼ね合わせるにしても、人々がそこから汲み取ったものの多くは、皮相的であったろう。それは、一面、無理からぬことだったのである。明治時代におけるレファレンス・ワークの紹介期にしろ、その後における強調期にしろ、わが国にレファレンス・ワークを移入するまでの歴史は、結果的には、レファレンス・ワークという概念に対する誤解の程度を、より少なくするという方向でつづられて来たともいい得るのではないだろうか。本稿で言及し、紹介して来た人々は、いずれも、こうしてつづられた歴史の中であって、それぞれの分に応じた役割を果たして来た人々なのである。

ところで、レファレンス・ワークやその本質的特徴としての人的援助の記述・紹介等が困難な理由は、こうした図書館サービスに限らずサービスというもの多くのが、本来そういう性格を有しているところにある。それは、サービスというものの評価が非常に困難であるという事実からも伺えよう。従って、当時の図書館員が、レファレンス・ワークなどという未だかつて耳にしたことのないようなものについて述べる場合、たとえそれが、目に見える存在としてのレファレンス・ライブラリアンに関する幼稚な記述に過ぎなかったり、また単に、米国の何処の図書館員はたいへん親切のようであったという感懐に終ったとしても、やむを得なかったのである。

(町田市立図書館)

- 1) Shores, Louis. The importance of library history <Marshall, John D., ed. *An American library history reader*. Hamden, Conn., Shoe String Press, 1961> p. 7.
- 2) ノーマン, E. ハーバート. “歴史の効用と喜び,” *思想*, no. 375, 1955. 9, p. 35.
- 3) Shores, *op. cit.*, p. 7.
- 4) 三宅千代二. “日本に於ける参考事務とその文献,” *図書館界*, vol. 3, 1952. 2, p. 79.
- 5) 田村盛一. “圖出納所ノ本質ト事務,” *圖研究*, vol. 11, 1938. 7, p. 305.
- 6) 吉野龍二. “私ノ参考事務ノオト,” *圖研究*, vol. 12, 1939. 1, p. 8.
- 7) 塚本勝雄. “読書相談係を通じて見たる市立名古屋図書館,” *市立名古屋図書館々報*, no. 37, 1927. 1, p. 4.
- 8) 進 昌三. “学校図書館に於ける読書案内の実際,” *図書館雑誌*, Vol. 31, 1937. 7, p. 204.
- 9) 佃 実夫. 文献探索学入門. 東京, 思想の科学社, 1969. p. 68-9.
- 10) *Library literature*, 1921/32- New York, Wilson, 1934- では, 1958 年から, それまで使用していた reference work という件名を reference service に変えた.
- 11) Rothstein, Samuel. “The development of the concept of reference service in American libraries, 1850-1900,” *Library quarterly*, vol. 23, Jan. 1953, p. 2.
- 12) *Loc. cit.*
- 13) *Ibid.*, p. 3.
- 14) 毛利宮彦. “個人と公衆図書館,” *図書館雑誌*, no. 29, 1917. 2, p. 39.
- 15) *Ibid.*, p. 37.
毛利が参考にしたのは, Bostwick, Arthur E. *American public library*. New York, D. Appleton, 1910. xiii, 393 p. ではないかと思われる.
- 16) 今沢慈海. “参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務,” *図書館雑誌*, no. 55, 1924. 3, p. 3.
- 17) *Ibid.*, p. 2-3.
今沢のこの論文は, Kroeger, Alice B. *Guide to the study and use of reference books*. 3d ed., rev. throughout and much enl. by Isadore G. Mudge. Chicago, A.L.A. 1917. p. x-xii. を翻訳紹介したものである.
- 18) Dana, John C. *A library primer*. New York, Library Bureau, 1920. p. 60-7, reference work. のことである.
- 19) 小谷誠一. “図書館に於ける参考事務,” *図書館雑誌*, no. 78, 1926. 4, p. 6.
- 20) 小谷が参考にしたのは, Bostwick, *op. cit.* か, もしくはこれの第2版 (1917. xiii, 396 p.), あるいは第3版 (1923. xii, 414 p.) であろうと思われる.
- 21) 小谷, *op. cit.*, p. 6.
小谷が参考にしたのは, Brown, James D. *Manual of library economy*. London, Scott, Greenwood, 1903. xi, 476 p. か, もしくはこれの改訂版 (London, The Library Supply, 1907) であろうと思われる.
- 22) 小谷, *op. cit.*, p. 6.
- 23) 塚本, *op. cit.*, p. 4.
- 24) 塚本勝雄. “市立名古屋図書館の読書相談,” *図書館雑誌*, vol. 22, 1928. 12, p. 300.
- 25) 毛利宮彦. 参考事務の組織と内容 <田中敬, 毛利宮彦共編. 内外参考図書の知識. 東京, 図書館事業研究会, 1930> p. 8-9.
毛利が参考にしたのは, Bishop, William W. *Backs of books and other essays in librarianship*. Baltimore, Williams and Wilkins, 1926. p. 149-64, The theory of reference work. と Dana, *op. cit.* であろうと思われる.
- 26) 毛利宮彦. 図書の整理と運用の研究. 東京, 図書館事業研究会, 1936. p. 296-308, 参考事務の組織と実際.
- 27) Wyer, James I. *The college and university library*. 3d ed. Chicago, A.L.A., 1928. 39 p.
- 28) 植村長三郎. “学校図経営概論,” *圖研究*, vol. 4, 1931. 4, p. 310.
- 29) 武田虎之助. “公共図管見,” *圖研究*, vol. 9, 1936. 1, p. 22.
武田が参考にしたのは, Dana, *op. cit.* か, もしくはその紹介記事であろうと思われる.
- 30) 田村, *op. cit.*, p. 305.
- 31) 渋谷国忠. “参考事務要論,” *図書館雑誌*, vol. 33, 1939. 1, 2, p. 10-5, 30-2, 48.
- 32) Wyer, J. I. *Reference work*. Chicago, A.L.A., 1930. p. 6-7.
- 33) Bishop, *op. cit.*
- 34) 渋谷, *op. cit.*, p. 10-11.
- 35) Wyer. *Reference work, op. cit.*, p. 9-13.
- 36) 渋谷, *op. cit.*, p. 11.
- 37) 山下 栄. “医学圖ニオケル雑誌利用法,” *圖研究*, vol. 13, 1940. 1, 4, 7, 10, p. 25-35, 89-116, 185-202, 343-84.
Ibid., p. 28.
- 38) *Ibid.*, p. 28.
- 39) *Loc. cit.*
- 40) Cowley, J. D. *The use of reference material*. London, Grafton, 1937.
- 41) Ballard, James F. “Information, reference and bibliographical service,” *Bulletin of the Medical Library Association*, vol. 17, 1927, p. 18-27.
- 42) 志智嘉九郎. レファレンス. 東京, 赤石出版, 1962. p. 23-4.
- 43) 伊藤旦正. “公共図書館における参考事務の運営について,” *図書館雑誌*, vol. 45, 1951. 8, p. 175.

- 44) Hutchins, Margaret. *Introduction to reference work*. Chicago, A.L.A., 1944. p. 10.
- 45) 文部省監修. 図書館学講義要綱. 改訂版. 東京, 日本図書館協会, 1952. p. 71.
- 46) Illinois. University. Library, 大学図書館のレファレンス・ワーク [Staff manual. 2d ed.] 裏田武夫訳. 東京, 東京大学附属図書館, 1953. 18 p.
- 47) 日本図書館協会 公共図書館部会 参考事務分科会. 参考事務規程解説. 東京, 1962. p. 5.
- 48) *Loc. cit.*
- 49) *Loc. cit.*
- 50) Shores, Louis. *Basic reference sources*. Chicago, A.L.A., 1954. p. 11-17.
- 51) *Ibid.*, p. 17-21.
- 52) 小田泰正. レファレンス・ワーク. 東京, 日本図書館協会, 1966. p. 12.
- 53) Rothstein, Samuel. *The development of reference services through academic traditions, public library practice and special librarianship*. Chicago, Association of College and Reference Libraries, 1955. p. 100.
- 54) 発表の内容に関しては, *Ibid.*, p. 21-2., および Shaw, Robert K. *Samuel Swett Green*. Chicago, A.L.A., 1926. p. 28-9. 等を参照せよ.
- 55) 長沢雅男. 参考調査活動序講. 東京, 慶應義塾大学文学部図書館学科, 1964. p. 11.
- 56) 三宅, *op. cit.*, p. 79-82.
- 57) *Ibid.*, p. 82.
- 58) *Ibid.*, p. 79.
- 59) *Loc. cit.*
- 60) *Ibid.*, p. 80.
- 61) *Loc. cit.*
- 62) *Loc. cit.*
- 63) *Ibid.*, p. 80-1.
- 64) *Ibid.*, p. 81-2.
- 65) *Ibid.*, p. 81.
- 66) *Ibid.*, p. 82.
- 67) *Loc. cit.*
- 68) 志智嘉九郎. レファレンス—公共図書館における実際—. 東京, 日本母性文化協会, 1954. p. 1.
- 69) *Loc. cit.*
- 70) 北島武彦. “レファレンス・ワーク 文献の手引 第6回,” *図書館雑誌*, vol. 53, 1959. 6, p. 212.
- 71) 木寺清一, 鈴木正次. “参考事務文献リスト,” *LIBER* 資料篇, no. 1, 1960. 3, p. 1-3.
- 72) 武居権内. 日本図書館学史序説, 東京, 理想社, 1960. p. 294-8.
- 73) 志智, レファレンス, *op. cit.*, p. 16-22.
- 74) *Ibid.*, p. 16.
- 75) *Ibid.*, p. 18-9.
- 76) 長沢雅男. 参考調査法. 東京, 理想社, 1969. 262 p.
- 77) 佃, *op. cit.*, 161, 137 p.
- 78) *Ibid.*, p. 74.
- 79) *Ibid.*, p. 83.
- 80) 木寺清一. “図書館奉仕,” *図書館界*, vol. 11, 1959. 8, p. 66.
- 81) 北島武彦. レファレンス・サービス 〈北島武彦編著. 図書館奉仕論. 東京, 理想社, 1969〉p. 143-63.
- 82) *Ibid.*, p. 147-9.
- 83) 長沢, 参考調査活動序講, *op. cit.*, x, 278 p.
- 84) 長沢雅男. 参考調査資料概説. 東京, 三田図書館学会, 1967. vi, 309 p.
- 85) 長沢, 参考調査法, *op. cit.*, p. 59.
- 86) 筆者が, この点について著者に尋ねたところ, 当時を知る人から直接聞いたものであるという解答を得た.
- 87) 長沢, 参考調査法, *op. cit.*, p. 52.
- 88) 北原園彦. 図書館サービス発達史の研究と文献の問題〈日本図書館学会. 第17回総会・研究大会発表要綱, 東京, 1969〉p. 16. なお, 詳細は*図書館学会年報*, vol. 16, 1970 に掲載の予定である.
- 89) 昭和28年8月8日 法律第185号. 最終改正昭和41年6月30日 法律第98号.
- 90) Kaplan, Louis. “The early history of reference service in the United States,” *Library review*, no. 83, Autumn 1947, p. 286.
- 91) 長沢, 参考調査法, *op. cit.*, p. 64-70.
- 92) Rothstein. *The development of reference services...*, *op. cit.*, p. 4-5.
- 93) Kruzas, Anthony T. *Business and industrial libraries in the United States, 1820-1940*. New York, Special Libraries Association, 1965. p. 1-2.
- 94) 北原, *op. cit.*, p. 16.
- 95) 福沢諭吉. 西洋事情. 初篇. 慶應義塾蔵版, 尚古堂発兌, 1866. 福沢諭吉全集. 第1巻. 東京, 岩波, 1958. p. 305. 所載.
- 96) 竹林熊彦. “明治初年ノ圖書事業小観,” *園研究*, vol. 6, 1933. 12, p. 405.
- 97) 裏田武夫, 小川 剛. “明治・大正期公共図書館研究序説,” *東京大学教育学部紀要*, vol. 8, 1965, p. 153.
- 98) 西洋学校軌範. 巻之下. 小幡甚三郎撮訳, 吉田賢輔校正. 慶應義塾蔵版, 尚古堂発兌, 1870.
- 99) United States of America. Department of Interior. Bureau of Education. *Public libraries in the United States of America; their history, condition and management; special report*. Pt. 1. Washington, D.C., Government Printing Office, 1876.
- 100) Kaplan, *op. cit.*, p. 286-7.
- 101) Spofford, Ainsworth R. *Works of reference for libraries* 〈United States of America. Department of Interior. Bureau of Education,

- op. cit.* p. 686-710.
- 102) Dewey, Melvil. A decimal classification and subject index <*Ibid.*> p. 623-48.
- 103) Cutter, Charles A. Library catalogues <*Ibid.*> p. 526-622.
- 104) 東壁, no. 1-4, 1901. 4-1902. 3.
- 105) 神奈川県図書館協会編. 神奈川県図書館史. 横浜, 神奈川県立図書館, 1966. p. 9.
- 106) 目賀田種太郎. “書籍館ノ事,” *教育雑誌*, no. 80, 1878. 10. 竹林, *op. cit.*, p. 403-25. に所載.
- 107) *Library journal* のことであろう.
- 108) 第1回全米図書館大会のことであろう.
- 109) ウスター公共図書館長 Samuel Swett Green 等の発表に関連した討議であろうと思われる.
- 110) 1877年にロンドンで開かれた, 第1回国際図書館大会のことであろう.
- 111) ポストン公共図書館のことであろう.
- 112) 目賀田, *op. cit.* を, 竹林, *op. cit.*, p. 416. より再引用.
- 113) Justin Winsorの採用したサービス様式については, Rothstein. *The development of reference services ...*, *op. cit.*, p. 23-4. を参照せよ.
- 114) 竹林, *op. cit.*, p. 416.
- 115) 湯浅吉郎. “エール大学の図書館につきて,” *東壁*, no. 4, 1902. 3, p. 2-5.
- 116) *Ibid.*, p. 3.
- 117) Aisoworth R. Spofford の並みはずれた記憶力とサービスとの関係については, Rothstein. *The development of reference services...*, *op. cit.*, p. 30. および Malone, Dumas, ed. *Dictionary of American biography*. vol. 17. New York, Scribners, 1935. p. 464. を参照せよ.
- 118) 湯浅吉郎と図書館界との関係については, 研究が盛んのようなのである. 詳細なものとしては, 竹林熊彦. “湯浅吉郎と図書館事業,” *土*, no. 50, 1957. 9, p. 7-11; no. 51, 1958. 1, p. 2-7; no. 52, 1958. 3, p. 8-11; no. 53, 1958. 7, p. 11-4; no. 55, 1958. 11, p. 6-10; no. 56, 1959. 2, p. 8-12; no. 57, 1959. 3, p. 2-5; no. 58, 1959. 7, p. 2-5. があるし, 最近のものとしては, 井上裕雄. “湯浅吉郎 研究ノート—京都府立図書館長就任と同館十進分類法—,” *図書館界*, vol. 21, 1969. 7, p. 57-9. がある.
- 119) “日本文庫協会例会,” *私立成田図書館報告*, no. 7, 1905. 2, p. 7-8.
- 120) *Ibid.*, p. 7.
- 121) この時期には, 多くの大学, 専門学校, 師範学校で, 図書館もしくは図書課を設置していた.
- 122) 赤堀又次郎. 序<森 洽蔵編, 今園貞補. 日本文学者年表. 続篇. 東京, 大日本図書, 1919> p. 3-4.
- 123) *Ibid.*, p. 4.
- 124) 田中稲城. 図書館管理法. 東京, 金港堂書籍, 1900. p. 108. なお, 明治 45 (1912) 年に出版された, この訂正版ともいうべきものにも, この部分の説明は, そのまま残されている.
- 125) *Loc. cit.*
- 126) 教育公報, No. 306, 1906. 5. に掲載されたものを, 国立国会図書館支部上野図書館. 上野図書館八十年略史. 東京, 1953. p. 118. より再引用.
- 127) 和田万吉. 日本随筆索引の序<太田為三郎編. 日本随筆索引. 増訂版. 東京, 岩波, 1926> p. 1.
- 128) 太田為三郎. “索引に就て,” *市立図書館と其事業*, no. 46, 1928. 7, p. 7.
- 129) 帝国図書館. 帝国図書館概覧. 東京, 1906. 9 p. には, 人的援助の提供を思わせるような記述は含まれていない.
- 130) 坂本四方太. “図書館の急務,” *図書館雑誌*, no. 8, 1910. 3, p. 2.
- 131) “日本の図書館 52 年 53 年集計分析解説,” *図書館雑誌*, vol. 48, 1954. 6, p. 7.
- 132) 明治 42 (1909) 年の京都における大会から, 大正 9 (1920) 年の満州・朝鮮における大会までの期間で集計すると, 地方開催が 7 回, 東京開催が 5 回となる.
- 133) 明治 40 (1907) 年 10 月の第 2 回全国図書館大会では, 図書館職員養成所の設置に関する協議がなされた.
- 134) これは第 3 版である. 扉には, この年の 5 月急逝した山口県立図書館長佐野友三郎を称える, 中川望山口県知事の弔文「故山口県立図書館長佐野友三郎の霊前に捧げる」が載っている. 第 1 版は, 大正 5 (1916) 年, 第 2 版は, 大正 7 (1918) 年の出版である.
- 135) “図書館管理上の一頂針,” *図書館雑誌*, no. 1, 1907. 10, p. 62.
- 136) *Ibid.*, p. 62-3.
- 137) “威爾スカルデフ図書館の答話部,” *図書館雑誌*, no. 3, 1908. 6, p. 53.
- 138) “図書館に使用せる婦人,” *図書館雑誌*, no. 3, 1908. 6, p. 57.
- 139) “学校に於て図書館事務の練習,” *図書館雑誌*, no. 3, 1908. 6, p. 60.
- 140) “オハイオ州に於ける図書館事務の拡張,” *図書館雑誌*, no. 9, 1910. 7, p. 57.
- 141) “英国図書館瞥見記,” *図書館雑誌*, no. 11, 1911. 4, p. 45.
- 142) *Ibid.*, p. 48.
- 143) “図書出納係の心得,” *図書館雑誌*, no. 18, 1913. 9, p. 52.
- 144) *Loc. cit.*
- 145) *Loc. cit.*
- 146) “三代相伝の図書館員,” *図書館雑誌*, no. 22, 1914. 11, p. 57.
- 147) W.C.L. [William Coolidge Lane] “Thomas J. Kiernan,” *Library journal*, vol. 39, Sept. 1914,

- p. 691. Rothstein, *The development of reference services...*, *op. cit.*, p. 30 による。
- 148) ケオフ. 目録編纂及書目掛に就ての意見,” 太田為三郎訳. 図書館雑誌, no. 4, 1908. 10, p. 8. これは, Keogh, Andrew. “Catalogs and catalogers,” *A.L.A. bulletin*, vol. 2, 1908, p. 360-1. の翻訳紹介であろうと思われる。
- 149) *Ibid.*, p. 7.
- 150) ケリー. “小図書館の事務,” 太田為三郎訳. 図書館雑誌, no. 7, 1909. 11, p. 2-3.
- 151) 日本図書館協会編. 図書館小識. 東京, 1915. p. 170.
- 152) 第2次世界大戦前において, レファレンス・ライブラリアンをこのような立場から批判したものは, 小林花子. “図書館修業,” 書物の周囲, vol. 2, 1935. 11, p. 96. および, 武田虎之助. “目録係の職能—若くは目録作業の使命—,” 図書館雑誌, vol. 29, 1935. 11, p. 403. 等である。
- 153) 新渡戸稲造. 自序〈新渡戸稲造. 帰雁の声. 東京, 弘道館, 1907〉p. 2.
- 154) 今井彦三郎. 『帰雁の声』の後に〈新渡戸, 帰雁の声, *op. cit.*〉p. 2.
- 155) 新渡戸. 帰雁の声, *op. cit.*, p. 126.
- 156) *Ibid.*, p. 144-5.
- 157) *Ibid.*, p. 145-6.
- 158) *Ibid.*, p. 146-7.
- 159) *Ibid.*, p. 147.
- 160) *Ibid.*, p. 147-8.
- 161) 小谷誠一. “『迷路』より,” 市立図書館と其事業, no. 15, 1923. 8, p. 5.
- 162) 田村, *op. cit.*, p. 306-7.
- 163) 有島武郎. 迷路. 東京, 新潮社, 1918. p. 64-7. (有島武郎著作集, 5)
- 164) 和田万吉. “欧米図書館の現況一斑,” 図書館雑誌, no. 9, 1910. 7, p. 12.
- 165) 和田万吉. “西洋図書館建築の最近傾向,” 図書館雑誌, no. 15, 1912. 7, p. 42.
- 166) 佐野友三郎. 通俗図書館の経営, 山口, 山口県立山口図書館, 1915. p. 20-1. (山口県立山口図書館報告, 20)
- 167) *Ibid.*, p. 21-2.
- 168) ケムフィールド等. 師範学校教程図書館管理要項. 佐野友三郎抄訳. 山口, 佐野友三郎, 1911.
- 169) ケムフィールド等. “師範学校教程図書館管理要項,” 図書館雑誌, no. 24, 1915. 8. 付録.
- 170) *Ibid.*, p. 38-9.
- 171) 佐野友三郎. 米国図書館事情. 東京, 金港堂書籍, 1920. p. 139-40.
- 172) *Ibid.*, p. 91-117.
- 173) 田中 敬. 図書館教育. 東京, 同文館, 1928. p. 338-9.
- 174) *Ibid.*, p. 206.
- 175) *Ibid.*, p. 353-4.
- 176) 今沢慈海. “児童と図書館,” 図書館雑誌, no. 16, 1912. 12, p. 8.
- 177) *Ibid.*, p. 10.
- 178) 徳川頼倫〔無題〕 図書館雑誌, no. 19, 1914. 1, p. 7.
- 179) 沢柳政太郎. “図書館の教育的任務に就て,” 図書館雑誌, no. 19, 1914. 1, p. 21.
- 180) 京都帝国大学図書館案内. 京都, 1908. p. 2.
- 181) 日本図書館協会, *op. cit.*, p. 41.
- 182) 坂本, *op. cit.*, p. 1.
- 183) Kroeger, Alice B. *Guide to the study and use of reference books*. Boston, Houghton, Mifflin, 1902. viii, 104 p. 第2版は, 1908年の出版である。
- 184) 毛利. “個人と公衆図書館,” *op. cit.*, p. 39.
- 185) *Ibid.*, p. 40.
- 186) 平沼淑郎. “読書趣味と図書館,” 図書館雑誌, no. 39, 1919. 9, p. 43.
- 187) 帝国図書館報, vol. 1, no. 1, 1908. 5, p. 1.
- 188) 太田為三郎. “図書館は一の営業なり,” 図書館雑誌, no. 15, 1912. 7. p. 50.
- 189) 守屋恒三郎. “京都大阪神戸及日比谷図書館,” 図書館雑誌, no. 18, 1913. 9, p. 28.
- 190) *Loc. cit.*
- 191) 東京市立図書館一覧 自大正四年 至大正五年, 1916. p. 21.
- 192) “日比谷図書館の図書問合用箋,” 図書館雑誌, no. 26, 1916. 3, p. 41.
- 193) 今沢慈海. “公共図書館の使命と其達成—人生に於ける公共図書館の意義—,” 図書館雑誌, no. 43, 1920. 10, p. 4-5.
- 194) “京都府立図書館の質問応答規定,” 図書館雑誌, no. 29, 1917. 2, p. 73-4.
- 195) *Ibid.*, p. 73.
- 196) 上埜 衛. “京都府立図書館のレファレンス・ワークについて,” 私立大学図書館協会会報, no. 16, 1956. 7, p. 38.
- 197) 伊達友俊. “神戸市立図書館の経過,” 図書館雑誌, no. 15, 1912. 7, p. 54-5.
- 198) *Ibid.*, p. 60.
- 199) 岡山県立図書館60年史. 岡山, 岡山県総合文化センター, 1967. p. 5.